
これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

ラルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

【Nコード】

N1115Y

【作者名】

ラルド

【あらすじ】

友達の相川 歩がゾンビになってから全てがおかしくなった。ただの人間である藤島 春樹はどんな日常を送るのでしょうか。

第一話

今年も夏がやってきた。

俺が高校に入って初めての夏だ。

俺は暑さには耐えられるほうだが、窓際に座っている男に目をやる。

「おい歩、大丈夫か？」

机で突っ伏している歩に声をかける。

「大丈夫じゃあねえよ」

突っ伏しながら返事をする。それもそうだろう。なぜなら彼は……

ゾンビだから……

ちなみに俺はゾンビではない。人間だ。

俺の名前は藤島^{ふじしま} 春樹^{はるき}。なぜ彼がゾンビだということを知っているのかというと、最近この町で頻繁に起きている連続殺人事件に関係している。

今から一か月前、午前一時頃に俺はコンビニへ出かけた。

親は家にはいない。去年から海外旅行へ行ってしまったのだ。

近くのコンビニの前まで来てみると、相川 歩がわけのわからない

ことを彼の目の前にいる少女にやっていたのだ。
歩もおかしいが、少女の格好もあきらかにおかしい。

——なぜ鎧に籠手なんだ？

そんなことを思っていると、歩と目が合った。
俺は携帯を取り出して……

「もしもし警察ですか？ コンビニの前に幼女に手をかけようとしている高校生がいるんですけど」

「ちよつと待てーっ！」

歩は必死になって俺のところへ駆け寄る。

「冗談だつて。誰にもかけてねえよ」

そう言つて歩に携帯を見せる。確かに誰にもかけていない。

「ビックリさせんじゃねえよ」

冷や汗を垂らしながら言う。

歩とは高校で知り合い、両方とも両親が海外旅行へ行っていることがきっかけでそのまま仲良くなつてしまった。

そんなコントをしていると、先ほどの少女が俺たちの前へやって来た。

彼女はスカートの中からボールペンとメモを取り出して、そのメモを俺達に見せた。

『面白かつた』

どうやら、さっきのやり取りが面白つたらしい。

『だから二度とするな』

どつという意味だ？ まあ別にこんな奴とやるのも嫌だからいいけど

……。

そんなこんなで彼女は一言もしゃべらなかつたが、それなりに充実した時間を過ごせた。

俺達は適当なところで話を切り上げ、歩が「じゃあ、またな」と手を振り、一緒に帰った。

『気を付けて』

彼女手を振りかえそうともせず、ただ、生暖かい風に銀色の髪をなびかせていた。

俺は歩と別れて家に帰ろうとしたが、歩いて五分経つたところに気が付いた。

——そういえば、アイツの買ったもの、俺が持ってたっけ。

きつと彼女と話をしていてそのことを忘れていたのだろう。急いで歩の家まで走った。

しばらく走っていると、ある家の前で足が止まった。

その家は、ドアが開きっぱなしだったのだ。

しかも、玄関には見慣れた人が血を出しながら倒れていた。

「歩っ！」

俺は急いで彼の元へ駆け寄った。血だらけになっている体を起こした。

そのときに、誰かが俺の元へやって来た。コンビニの少女だった。

『彼から離れて』

メモに書いて俺に見せた。

『彼を助ける』

自分でもよくわからないが、彼女の言うとおりにして歩から離れた。彼女は歩の耳元で、俺に聞こえないようにささやいた。

ささやいた直後、いきなり目の前が真っ白に光った。

そして、死んだはずの歩が目を覚ました。

「春樹に……お前。……俺は、生きているのか？」

歩の胸元を見ると、傷がぱっくりと開いているのに平気な顔をしていた。

『死んでいる』

メモには残酷な返事が書かれていた。

『私が死なないようにした』

メモに付け加えた。

「お前は何者なんだ？」

俺は彼女に問いかけた。

『ネクロマンサー』

普通はそんなことを言われても信じないだろう。だけど、死んだはずの人間が蘇ったとなると信じせざるをえない。

「待てよ。犯人は俺が生きているってわかっているのか？ もしかしたらまだ俺を探しているんじゃないか？ ——俺はまた命を狙われるんじゃないか？ 春樹もこんなのに巻き込まれて大丈夫なのか？」

今の歩は明らかに気が動転している。

「落ち着け！ 俺のほうは顔も見られてないから大丈夫だ」

なんとか歩を落ち着かせた。

『心配ない 私が一緒に居る』

なぜだか、彼女の言葉には、それなりの重さがあった。

『私も命を狙われている だから 一人で居ない方が良い』

こうして、俺の友達、相川 歩は、ゾンビとなり、ネクロマンサーの『ユークリウッド・ヘルサイズ』通称『ユー』と一緒に住むこと

になった。

そして、ここから奇妙な日常が始まっていくのであった。

第二話（前書き）

2話目です。毎日投稿できるようにがんばりたいです。

第二話

話を戻して放課後、いつものように帰りの支度をする。

「春樹君。早く帰りましょう」

幼なじみが俺に言ってきた。

彼女の名前は橘瀬奈^{たちばな せな}。幼稚園の頃からの幼なじみだ。

肩くらいまで伸ばしてある髪、顔は綺麗に整っており、かわいいというより綺麗という言葉が似合うだろう。

穏やかで優しい性格。

そして、男全員が目に残ってしまふほどの豊満な胸が特徴的だ。

そのせいか、男と話すのが苦手になってしまい、唯一話せるのが俺だけだ。

俺としか話せないせいで、俺が他の男達にとばっちりをつけるのだが……。

「ああ、分かった」

俺は立ち上がり、教室を出る前にまだ机で寝ている歩に声をかけた。

「先に帰ってるぜ」

「おう、また明日な」

寝ながらの姿勢で手を振る歩。そして、そのまま瀬奈と家まで帰った。

帰り道、俺は嬉しそうにしている瀬奈を見ながら歩いていた。
俺は週に一度、彼女の家にお邪魔して夕食をご馳走になるのだ。
俺達の両親が昔からの友達だったらしく、瀬奈の両親は俺のことを
息子のように扱ってくれる。
歩いているうちに、いつの間にか別れる場所まで来たのだ。

「それじゃあ、またお家で会いましょう」
「おう、楽しみにしてるぜ」

瀬奈に別れを告げて自宅へ帰る。
そして、自宅についた後にやらなくてはいけないことが一つだけあ
る。

玄関に置いてある竹刀を掴んで庭へ向かった。
じいちゃんから毎日やれと言われているメニューをやらなくては
いけないのだ。

じいちゃんの名前は藤島 彦一。ふじしま ひこいち この世界では剣聖と呼ばれるほど
の剣術の達人だ。
そして、俺はじいちゃんからその剣術を教わっている。一ヶ月に
一度は家に行き、そこでいろんなことをおしえてもらうのだ。
自宅にいる間は、このメニューを毎日かかさずやっている。

自主練が終わったところには既に六時を回っていたので、急いで着替
えて片手に竹刀が入っている布を持ち、瀬奈の家へと向かう。
竹刀を持っていく理由は、歩がゾンビになってからも殺人事件は続
いているので、護身用にと持って持ってきた。
自宅を出て五分で、瀬奈の家に着いた。

「おじゃましまーす」

「こんばんは、春樹君」

瀬奈が玄関の前まで来てくれた。
リビングに入ると、テーブルの上には夕食がのっており、おじさんとおばさんが椅子に座って待っていた。

「「こんばんは、春樹君」」

橘夫妻は笑顔で俺を迎えてくれた。

みんなとご飯を食べるのはけっこううれしい。

俺は遅れたことを謝ったが、気にするなと言い、許してくれた。

瀬奈の隣に座り、みんなで手を合わせた。

「「「いただきます」」」

四人の声リビングに響いた。

夕食も食べ終わったころになると、七時三十分になっていたので帰ろうと思った。

その時瀬奈が玄関まで送ってくれた。

「最近殺人事件が起きてるけど大丈夫なんですか？」

「大丈夫だって。あの竹刀も持ってきたし、俺が強いこと知ってるだろ」

「でも……」

どうやら瀬奈は俺をこの家に泊まらせたいらしい。

さすがに年頃の男女が一つ屋根の下で泊まるのはマズイからなあ…

…。

俺は瀬奈の頭を撫でた。

「あつ」

撫でているとなんだかうれしそうな顔をする瀬奈。
昔からこれが好きだったんだよなあ。

「心配するなつて。また明日、会おうな」

「は、はい！」

満面の笑みを俺に向けて言った。
俺は少し照れくさくなったので、さつさと靴を履いて竹刀を片手に持ち、玄関の扉を開けた。

自宅へ帰る途中、俺は歩を見かけた。

「おい、あゆ……」

歩を呼ぼうとしたが、後ろについてきている女の子を見ると、なぜか裸に学ランというおかしな格好だったのだ。

歩も俺に気づいたらしく、しまった、という表情が見える。

「お前……、とうとう小学生に……」

「違うからな！ お前の言っていることは全部間違っているからな
！」

「よし、今すぐ自首しろ。罪は少し軽くなるぞ」

「いやだから誤解だからぁー！ー！」

「おい、アユム。さつきから何をやっているんだ？」

先ほどの学ラン少女が歩のところへやって来た。

「春樹、紹介する。コイツは魔装少女のハルナだ」

「はぁ……魔装少女ねえ……」

「アユム、こんな一般人に言っても信用してもらえないぞ」

「いや、信用する」

「うそ、マジで？」

それはそうだろう。なんせ歩はゾンビだし、その同居人も異世界人だからなあ。

「まあ、ここで話すのも何だし、とりあえず家で話すよ」

そんなこんなで歩の家にお邪魔した。

「お邪魔します」

本日二回目のお邪魔しますだ。

リビングに入ると、ユーが正座でテレビを見ていた。

「ひさしぶりだな、ユー」

「久しぶり」

ユーと会ったのは歩がゾンビになって以来だ。

それ以上何も話はせず、一緒にテレビを見ていた。

歩が着替えを終えてやって来た。ハルナはまだ来ていない。

「よし、とりあえず、さっきの出来事を話すぞ」

——墓地で偶然ハルナがメガロという化け物と戦っているところに遭遇し、偶然歩がハルナの魔力を奪い、偶然歩が魔装少女になり、そして現在に至ると。

そんな簡単な説明を受けて納得してしまうのも、俺がこの状況を理解してしまったからだろう。

いつの間にかハルナもユーをにらみつけながら座っていた。

「アユム、ご飯まだ？ お腹すいたんだけど？」

『肉がいい』

「はいはい。今すぐ作らせていただきますとも。春樹、お前も食べるか？」

「いや、俺はもう済ませてきたからいらないぞ」

「わかった。ハルナ、ユー。豚キムチでいいな？」

「うん！ それでいい！」

『素敵』

二人とも喜んでいる。異世界ではそんなものはないのだろうか。

「豚キムチですか……。私は味噌汁を頂きたいのですが」

知らない声でしたので、声がしたほうへ顔を向けると

美人の女性が座っていた。

第二話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。次も是非読んで下さい。

第三話（前書き）

今のところ、毎日投稿継続中です。

第三話

今、俺達は夕食を食べている。俺はいらないと遠慮したが、結局出されてしまったので仕方なく食べている。

「ええと……どちら様？」

ポニーテールで瀬奈と同じくらい胸が大きい美人の女性に尋ねてみた。

「私の名はセラフィムです」

……、自己紹介終わりかよっ！ 歩とハルナもそう思っているだろう。

「それだけ？ 好きなものとか特技とか、趣味とかあるじゃん！」

代わりにハルナが突っ込んでくれた。

「好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返しです」

質問には答えてくれたが、なんだよ秘剣、燕返しって……。

「なんでここにいるんだ？」

歩が彼女に質問する。

「任務です」

「どんな任務だ？」

「ユークリウッド・ヘルサイズ殿に、お力をお借りしたい」

ユーの方に目を向ける。しかし、ユー本人はどうでもいいような感じだった。今でもご飯を食べていた。

ネクロマンサー、魔装少女。ここ最近、おかしな奴ばかり現れている。

次はなんだ？ 吸血鬼か？

「私の任務は、ヘルサイズ殿の同意のもと、同行を求めることです」

「どこに？」

「忍者の里です」

「それじゃあ、君は忍者なのか？」

「はい、私は、吸血忍者です」

マジかよ。ほとんど当たってるじゃないか。忍者という単語を忘れていた。

ユーがメモに何か書き、俺達に見せた。

『歩 春樹 追い返せ』

「その必要はないんじゃないか。ユー」

歩が反論する。

『かまわない いいから追い返せ』

どうやら無駄らしい。

「ところで、あなたは、ヘルサイズ殿の何なのですか？」

セラ——セラフィムは長いので短くした——は歩を見てユーに尋ねた。

「俺はユーの保護者というか、まあ……」

『下僕』

おかしい妄想をしている間にユーの回答がだされた。そのせいで、落ち込んでしまった。

「では、彼は」

俺を見て言う。ユーはなんと答えるだろうか。正直、歩と同じレベルは嫌だ。

『友達』

おお、なんかうれしい回答だ。とりあえず、歩より上だと分かったのでよかった。

「友達ならば仕方ありません。ならば、こいつと同じように私が下僕になります。私のことはセラとお呼びください」

歩を差しながら真剣な表情で、セラは言った。

そして、ユーは『下僕』と書かれたメモに何か付け加えた。

『下僕は 一人でいい』

「でしたら、あなたはいいですね。どう見ても頭が悪そうだし」

「そこまで言うことないだろ。おい、春樹も何か言ってるやれよ」

「ま、確かにそうだな。彼女の方が優秀そうだし」

「確かに、アユムはバカだからな！」

『確かに』

「お前ら全員俺の敵だぁー！」

ここには歩の味方はいなかった。

「でしたら、あなた。私と勝負をしませんか？」

俺を指で差しながら言う。

「どういうことだ？」

「このバカの代わりにあなたと戦うと言っているんです」

「どうして俺なんだ？」

「あなた、かなりの剣の達人ですね。その体つきを見れば分かります」

「なっ！」

驚いた。まさか体を見ただけで分かるとは……。

「なにより、こんなバカと戦うより、あなたと戦うほうが有意義です」

「確かに、こんなバカと戦うとセラさんがかわいそうだもんね」

「はい、ですのでこのバカの代わりに勝負してください」

「おう、いいぜ。異世界の人と戦うなんて貴重な経験だ。このバカに代わって戦ってやるぜ」

「お前らさっきからバカバカ言ってんじゃねえー！」

歩の叫びが家中に響いた。

第三話（後書き）

やっと春樹が戦います。

春樹はチートでもないのに戦闘描写をうまくかけたいです。

第四話

どこか人のいない所でやりましようと言われたので、歩がハルナと出会った墓地へ移動した。

墓地がきれいだったことに歩が驚いており、ハルナによると、魔法の力で壊れたものや、記憶を消去できるらしい。

「あなたの剣はどうするのですか？」

「心配するな。外に出るときは毎日持ってきている」

そう言つて、持ってきた竹刀を布から取り出し、セラに見せた。

「竹刀戦つのですか？ それなら、もう勝負は見えていますね」

「ま、普通はそう思うだろうな」

俺は竹刀を軽く振った。

そうしたら、竹刀が突然刀に変化した。

これを見た三人——ユーは来ていない——は驚いていた。

「まさか、あなたも魔装少女なのですか！」

「ちげえから！ 男の魔装少女はアイツだけで十分だ！ 俺もよく知らないが、じいちゃんがくれたんだ。あの人、こういうカラクリが好きだからな」

「まあ、いいでしょう。それでは、始めましょう」

「あーちよつと待て。一つ、聞いていいか？」

戦闘が始まるところで、歩が声をかけてきた。

「なんですか？」

「吸血忍者とやらは、人を殺すのか？」

「殺しはしません、少し血を分けてもらっただけです」

「それを聞いて安心した」

歩が俺達から少し離れる。

俺を心配したのか、それとも自分を殺した犯人を聞いたのか、もしくは両方なのか、俺には分からないが安心していた。

「それでは、改めて始めましょう」

セラの瞳が赤になり、全身を覆うような黒いマントが現れた。どうやら戦闘態勢に入ったらしい。

「いきます」

その一言で、セラの姿が消えた。

俺は全身に悪寒が走り、咄嗟に一步下がった。下がった瞬間に、俺の胸元が浅く切られていた。

『好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返し』

歩の家で自己紹介したことを思い出した。

秘剣、燕返し——かの有名な佐々木 小次郎が得意とする剣技だ。一度切りつけた後、二太刀目に真の一撃を放つ技だった。

切られた痛みを我慢して、二太刀目の攻撃は避けられないと反応したので咄嗟に刀で防御した。

案の定、セラの二太刀目は防ぐことができた。避けていたらやられていただろう。

「人間にしては見事です。まさか一回目で私の燕返しを防ぐとは」
「そいつは、どうも」

つば競り合いをしながら会話をする。どうやら彼女の剣は葉っぱで出来た剣だった。

そのままつば競り合いのまま、刀を離し、セラが前のめりになったところで背中に回り込み、地面に思いつき叩きつける。

だが、さすがは吸血忍者。そんなんではやられたりはしない。

俺は急いで刀を取り、後退する。

「甘く見ていました……。まさかあそこで剣をすてるなどとは……」

セラはまるでダメージがないかのように平然と立ち上がった。

そして、彼女の背中から、緑色の翼が生え、上空に飛んだ。

「秘剣、燕返し。——八連！」

上空から八つの斬撃を飛ばしてきた。もはや燕返しですらない。

俺は斬撃を一つ一つ受け止め、攻撃を防いでいるが、完全には防ぎきれず、所々で体に傷ができる。

三、四、五……、刀で受け流すのはいいが、そろそろ刀も限界に近づいてきた。

——さつき、ピキッって聞こえたからなあ。

七、八！ やつと終わった。

斬撃が地面へいったので、俺は土煙で隠れている。

そのせいか、セラが俺を探すために少し高度を下げた。

——このチャンスを逃すわけにはいかない！

俺は墓石を踏み台にして、セラにめがけて跳んだ。

土煙から出た俺に気づいた時にはもう遅かった。既に背後を取られ

ていたのだ。

「藤島流——紫電！」

相手の頭に向かって刀を振った——もちろん、みね打ちで——。
モロにくらったセラはそのまま地面に激突した。

「くっ！」

さすがに頭を叩いたので、簡単には立てなかった。
俺はセラの背後に着地し、そのまま首筋に刀をおいた。

「俺の勝ちだな」

「参りました。油断していたとはいえ、負けは負けです」

「本当に俺の勝ちだぜ」

念のため、もう一度言う。

「はい、私の負けです」

「ふうー。いやー、あぶねえあぶねえ。見事に騙されてくれてよかったぜ」

そう言つて、俺は刀を離す。

地面に落ちた刀はバラバラに崩れてしまった。

「なっ！」

それを見たセラが目を見開いた。同じく歩とハルナもびっくりしていた。

「正直言つてあぶなかつたぜ。頭をたたいた後、完全に割れかけてたんだからな」

「い、今の参つたは無効です！ もう一度勝負をお願いしたい！」

「おいおい、俺は二回も聞いたんだぜ、俺の勝利を。お前は二回ともはいと言つたんだ」

「くっ」

見事に悔しがっている。これで帰ってくれるだろう。

「わかりました。それでは、私は家に帰らせていただきます」

俺を最後に睨みつけながら、消えていった。

「お前、かなり強かつたんだな」

歩が俺のところに来て、感心する。

「伊達に子供のころから鍛えてないぞ」

「そついえばお前、傷は大丈夫なのか？」

ハルナもやってきて俺の傷を触る。

「いつつてー！ー！」

最初にやられた胸元の傷があつたのを忘れていた。くそつ、意識してきたらだんだん痛みが出てきたぞ。

「やめろ！ 触るな！ チビ！」

「むっ！」

怒ったのか、さらに強く傷口に触れてくる。
俺は痛みに耐えきれず――

そのまま気絶した。

目が覚めると、そこは歩の家だった。どうやら客間で寝ていたらしい。

携帯の時計を見ると、夜中の一時だった。
胸の傷を見たが、なぜか傷口はなかった。

「目が覚めましたか」

「うおっ！」

いきなりセラが出てきた。

「って、なんでお前がいるんだよ？ 帰ったんじゃないのか？」

「いったはずです。家に帰ると」

「ああ、なるほど！ 歩の家なのか――ってここに住むのかよ！」

「はい、任務を果たすために。そういうことなので、私は不本意ながらクソ虫の下僕になることにしました」

クソ虫ってのは歩のことだろう。

「そういえば、切られた傷はお前が治してくれたのか？」

「いいえ、その傷はヘルサイズ殿が治しました」

「そうだったのか。後でお礼を言っとかないとな」

明日にでも言っておこう。

「そして、もう一つ、やらなくてはいけないことができました」

「へえ、なんだ？」

「あなたを倒すことです」

「あれはほとんどお前の勝ちだぞ」

「それでも、負けは負けなので」

どうやら吸血忍者ってのはプライドが高いらしい。

「はいはい、わかりましたよ。またいつか、戦ってやるよ」

「約束です」

そう言つて、彼女はこの場から消えた。

俺も今日はここで寝ようと思い、もう一度寝なおした。

第四話（後書き）

紫電——相手の頭上まで飛び、頭にめがけて高速で打ち下ろす剣技。
初めて剣技を書いてみました。他にもいろいろ書くようにします。

第五話

本日は土曜日。俺は起きるのがめんどくさいので、午後までずっと寝ていた。

二時になってやっと起き、リビングに行くと、みんなそこでテレビを見ていた。

「みんな、おはよう」

『おはよう』

「よう、刀の。遅かったじゃないか」

「まったく。とつくに昼は過ぎていますよ」

「やけに遅かったじゃん。体は大丈夫なのか？」

俺は座り、みんなと一緒にテレビを見た。

「っていうか、なんだよハルナ、『刀の』って」

「あんたの名前、忘れたからそう呼んでいる」

「昨日、名乗っただろ！」

「私は天才だから人の名前覚えるのがめんどくさいんだよ！」

これ以上言うのはよそう。なんだか、ハルナに言っても無駄なような気がする。

「ユー、昨夜はありがとな。傷を治してくれて」

『気にしなくていい』

ここで話が途切れたので、テレビを見ることにする。

ちょうど天気予報が放送され、今日の夕方から雨が降るらしい。

——雨？

「ヤバい！ 洗濯物取り込むのを忘れていた！」

昨日は家に帰っていないから、洗濯物がそのまま干されたまんまだった。

「悪いが、これで帰らせてもらっ。また来るからな！」

俺はダッシュで家に帰った。

だんだんと雨がパラパラと降ってきた。

ようやく家に着いたが、すでに洗濯は取り込まれていた。扉には鍵がかかっていなかった。

きっと瀬奈が入っているのだろう。

「ただいま」

「あっ、おかえりなさい。春樹君」

やはり瀬奈だった。

「洗濯物取り込んでくれたのか？ ありがとな」

「え、別にいいですよ。そ……それに、これってま……まるで新婚さ——」

いきなり瀬奈の声を遮るかのように、俺の携帯が鳴った。相手は歩だった。

「もしもし？」

「春樹か？ 実は織戸が連続殺人事件の生き残りの子に会わせてくれることを言うのを忘れていたんだ。お前も来るか？」

「わかった。いつ集合なんだ？」

「四時くらいに地元の病院で」

「了解」

携帯を閉じる。

連続殺人事件。なんで俺がその事件に関わりたと思ったのは、不謹慎だが、こういうトラブルみたいなことが好きだからだ。

そのおかげで、俺は異世界人と会うことができた。これ以上に面白いことはないだろう。

時刻は二時半。まだまだ時間はある。

「瀬奈。俺、夕方ころに出かけるから、帰るときは鍵をかけなくていいぞ」

「え、は、はい……」

「あと、まだ時間があるから、宿題教えてくれ」

「は、はい！」

集合時間まで、瀬奈は宿題を終わらせていたので俺の宿題を手伝ってもらった。

四時、俺は歩の言われた通り病院の入り口で待っていた。雨はもうやんでいる。

今回もスピアの竹刀を持ってきた。

待つこと五分、歩と織戸が二人でやって来た。

「あれ？ 春樹まで来てたのか？」

「歩に誘われたんだ」
「そういうこと」

そして、三人で病院へ入った。
ちなみに織戸というのは、簡単に言つとツンツン頭の変態だ。歩を
通して仲良くなつてしまった。

入院している子の部屋に入ると、そこには女の子がこちらを見てき
た。

「あ、織戸先輩！——え？ あ、いかわさん？」

歩を見るなり、顔を赤くした。

「おいつ、京子！ 髪型はツインテールにしとけつて言つといただ
ろ？ 相川はツインテールに萌えるんだぞ！」

織戸に言われ髪を結ぶ京子。

そしてツインテールにして、事件の出来事を話してくれた。
彼女を襲つたのは、青く、きれいな目、年齢は彼女と同じくらい。
それを聞いた俺と歩は耳を疑つた。顔を見合わせ、彼女に聞いてみ
る。

「妙なガントレットを付けた、銀色のサラサラヘアー？」

歩が言い、彼女は「そうです！」と肯定した。そして、今度は俺が
聞いてみる。

「襲われたのはいつなんだ？」

「たしか……五月二十六日の深夜です」

おいおい、その日は歩がゾンビになってユーと初めて出会った日じゃないか。

俺はなんとなく窓側へ行き、窓を開ける。

そのときベッドの下から何かが出ているを見た。

しゃがんでベッドの下を見ると、木刀が置いてあった。

「なんで木刀が？」

「我が家に伝わる伝統の品です。なんちゃって」

ジョークを言う京子。歩は微笑ましい表情で彼女を見ている。

でも、俺はあの木刀が気になったが、これ以上の詮索は彼女のプライベートに関わるかと思ったのでやめた。

病院から出ると、織戸が歩に向かってお礼を言った。

「別に、俺は何もしてないぞ？」

「京子は相川の顔が見れただけで満足してんだよ」

歩は照れくさくなって、織戸から目をそらす。

「はん。こんな奴のどこがいいんだか」

どこかで聞き覚えのある声がした。

声のする方向に顔を向けると、ハルナが立っていた。

しかもその格好は、ワイシャツとピンクのヒモパンだけだった。

「お前、なんて格好してんだよ」

あきれた様子でツッコむ。

「お、おい相川、春樹、なんだこの極上美少女は？」

織戸は呆然と立ちすくんでいた。

「こら！ こつち見んなっ！」

ならそんな格好するなよ！ と心の中でツッコむ俺。

今思うと、ハルナが来たってことは、近くにメガロがいるのだろう。俺は、まだ一度もメガロを見たことがないので、かなり気になる。

メガロは学ランを着ているのが特徴だと歩から聞いた。

ハルナは、上を指して俺達は空を見上げた。

そこには、学ランを着た巨大なシロナガスクジラのメガロが浮かんでいた。

第五話（後書き）

また、春樹が戦つかもしれません。
明日も投稿できるように努力します。

第六話

「おいおい、ありや何だよ？」

俺は上を見ながら初めて見るメガロに驚いた。でかすぎだろ。

歩が最初に戦ったメガロは熊って聞いたけど、これって勝てるのか？

「あれがトリプルAランクのメガロ、常敗無勝のシロナガ！」

「何だよそれ！ 常敗無勝って一度も勝ったことがないのかよ！」

「間違えた。えと……えゝあー悪魔男爵シロナガ！」

適当に答えるハルナだった。

「ハルナ、春樹！ 織戸を頼んだ」

「わかったけど、お前アレに勝てるのか？」

「いいから早く倒せよな！ あたしのために！ あたしだけのために！」

「お前はもう黙ってる」

俺はハルナの頭を叩いて織戸に近づいた。

「当身！」

「ふっ！」

織戸を気絶させた。そして、そのまま織戸を肩に担いだ。

「俺にはどうしようもないから、後は頼んだぞ」

「わかってる」

歩は走って病院の屋上まで跳んだ。

「おい、ハルナ。ここから離れるぞ！」

とりあえず、俺達はここから離れることにした。

病院から数メートルの所まで離れた。

歩のほうは、見てみるとどうやら苦戦している。

助けてやりたいのは山々だが、俺達にはどうすることもできない。そんなとき、ハルナの近くの木にあるチェーンソーを見つけた。よく見ると、あれは昨日の夜に歩が持っていたやつじゃないか。

「あつ、そうだ！　これを渡さないと魔装少女になれないんだ！」
「そういう大事なことは早く言えよ！」

織戸を適当な場所に置き、チェーンソーを持った。

「これを歩の所に持っていけばいいんだな」
「あたしも行くぞ！　結界を張ることくらいはできるしな！」
「よし、行くぞ」

病院の屋上まで向かった。

「おい、歩！」

屋上に到着してすぐ、苦戦している歩にチェーンソーを投げ込んだ。

「げ、これってまさか」

「変身方法は教えたとおりにやれよ！」

ハルナが両手を上に掲げ、結界を張っていた。

「——っそ！ ノモブヨ、ヨシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

呪文を唱えると、歩が光った。そして、光の中からは変態が出てきた。

「くっそお！ このコスプレだけは嫌だったんだよ！」

歩が近づいてきたので、俺は距離をとった。

「近寄るな変態」

「チックシヨーーー！」

歩はやけくそになってシロナガに向かって飛んだ。

魔装少女になると空も飛べるのか。

シロナガを切ろうとしても、敵がでかすぎるため、深くは切れなかった。

しばらくすると、また屋上に戻ってきた。

「アユム！ 早く倒せよな！ もお、無理いつ！」

どうやらハルナも限界らしい。

どうしようかと考えているときに、セラが屋上にやって来た。

「あれ？ どうしてセラフィムがいるんだ？」

「ヘルサイズ殿に頼まれて来たのですよ。それにしても、歩。その格好はとても気持ち悪いですね。」

「ああ、その意見には同意だ。その格好はとても気持ち悪い」

「いちいちもう一度言うなよ！」

「とりあえず、あれを倒せばいいんですね」

そう言っつて、緑色の翼を羽ばたかせシロナガに向かった。

歩もセラに付いていく。

そして、セラがシロナガの首下半分を切り、歩が全力で蹴った。

シロナガはベッキとは折れず、爆発した。

急いで俺とハルナは下に降りて歩たちの元へ向かう。

「おい、大丈夫か？ セラフィム、変態」

「ええ、大丈夫です」

「俺、もう泣くぞ」

歩は魔法で建物の修復と記憶の消去を行った。

「あれ？」

「どうかしたのか？」

首をかしげる歩に聞いてみる。

「お前の記憶も消そうとしたんだが、なぜか消せない」

「まあ、いいじゃん、それくらい」

軽く受け流す俺だった。

「春樹！」

セラが木の葉を剣に変えて両手に持った。深紅の瞳は俺に向けていた。

いや、違う！

俺は後ろから殺気を感じ、瞬時に肩にかけてあるケースを手に取り防御した。

竹刀に何かが当たった。この感触は、もし防御しなかったら心臓を貫かれていただろう。

相手を見ると、そいつは学ランを着たアリクイだった。

本日二匹目のメガロだ。

第七話

「あれは、ヘビー級メガロ、モハメド・クイ」

ハルナが言うと、アリクイは俺から離れて、軽くフットワークをとる。

「おい歩、また変身しろよ」

「あ、魔装少女になれるのは二十四時間に一回だけだから」

マジかよ。

セラを見してみるが、翼は消えており、少し疲れているように見える。

「セラフィム、大丈夫か？」

「いいえ、血が足りないせいか、力が出ません」

セラはどうやら戦えないらしい。

「しょうがない。歩、二人で戦うぞ」

「足引っ張んなよ！」

竹刀を刀に変え、アリクイに向けて構える。その隣で歩がボクシングのような構えをとっている。

「ハルナ。一つだけお願いがあります」

「な、何だよ。変なことなら、蹴るからな」

「あなたの血がほしい」

後ろからそんな言葉が聞こえ、二人は何かをしている。

俺はその光景は見え、アrikuiと戦っている。
何だか、ハルナが嗚咽のような悩ましい声を出しているから余計気になる。

アrikuiを蹴り飛ばして、ハルナ達のほうを見てみた。
その光景を見ると、なんだかこつちまで恥ずかしくなってきたので戦闘に集中した。

アrikuiは素早い動きで俺達を攻撃してくる。
幸い俺は何とか見えているから防げるが、歩のほうは見事にボコボコにされている。

ゾンビでも、動体視力までは上がらないらしい。

「危ない！」

俺は歩を突き飛ばし、さっきまで歩がいたところには何かが出てきた。

それは、アrikuiの舌だった。

最初の攻撃も舌だったのだろう。

俺は反撃をするために、アrikuiの懷に潜り込んだ。
上段から刀を振ったが、避けられてしまった。

だが、避けられた瞬間にもう一度構え、相手の腹を突いた。

「藤島流——おいかけ追懸！」

相手の腹を貫いた。

けど、アrikuiは腹に喰いこんでも平然としていた。
刀を抜き、アrikuiから距離をとる。

「お待ちせ致しました」

やっとセラが来てくれた。

「遅いぞ。俺ももう疲れたから、後は頼んだぜ」
「わかったます」

ボコボコになつてる歩を引きずりながら、ハルナの所まで避難した。

「木の葉の如く舞い飛ぶ剣、即ち――」

木の葉が大きな剣に変わる。

「飛剣、百鬼漸殺」

一瞬でアリクイがやられた。――やっぱり強ええんだな。
一瞬でケリをつけるセラに関心を持つ。

俺は手を挙げ、セラは何も言わずに俺の手を叩いた。

「歩、彼女のこと、どう思う」

「いきなりなんだよ。まあ、あの子は嘘を言っているようには見えなかったがな」

「そうか……」

帰り道、京子という少女が気になったので歩に聞いてみた。

正直、俺はユーが犯人とは思えなかった。それに、彼女のベッドの下にあった木刀。いったいあれは何なのだろうか。

「それじゃあな」

「なんだ？ 飯食ってかないのか？」

「今日はコンビニの弁当が食いたい気分なんだよ」

そういつて俺は歩と別れる。

家に着くと、家には電気が点いていた。

「まさか……」

扉を開け、台所まで行くと、瀬奈が料理を作っていた。

「あつ、春樹君。おかえりなさい」

「ああ、ただいま、ってお前帰ってないのかよ。親は大丈夫なのか？」

「はい、お父さんたちには言っておいたので今日は泊まってきます」

「はあ……しょうがねえな」

今までも何回かあったので、もう諦めかけている。

コンビ二弁当はまたいつか食べようと思い、出来上がった料理を二人で食べた。

途中、歩からメールが来たので携帯を開いてみると『助けて』と書いてあったが、後からまたメールが来て『心配いりません』とセラが書いたメールが送られてきたので無視した。

第七話（後書き）

追懸おいかけ——上段から刀を振り降ろし、相手が避けた所構えなおして、
突く技。

二つ目の剣技を書けました。もう少し書いていきます。

第八話

「春樹君、一緒にボウリングへ行きませんか？」

昼飯と一緒に食べている瀬奈から誘われた。

「なんでいきなりボウリングなんかに行こうと思ったんだ？」

「友達からボウリングのタダ券をもらったんです。使わないのももったいないので、お昼食べてから行きませんか？」

「家に居ても暇だからな。よしっ！ 行こうぜ」

——いい気分転換にもなるしな。

すぐに昼飯を食べ終え、着替えをして、竹刀をケースに入れて準備ができた。

今日は平穩に過ごしたかった俺であった。

ボウリング場に着き、早速ゲームを始めた。

ゲームが後半までやると、何やら近くで聞き覚えのある声がする。

「げっ！」

歩と織戸だ。

さらにハルナ、ユー、セラの三人までもいた。

まさかあいつらもここまで来るとは思ってもみなかった。

「どうかしたんですか？」

瀬奈が心配して俺に聞いてくる。

「大丈夫だ、問題ない」

「？」

焦りながら言う俺に首をかしげている。

なんとか誰にも気づかれずに終わらせたかったが、その願いは早くも打ち碎かれた。

「おい、あそこにいるの『刀の』じゃねえ？」

ハルナが大声で叫んでくる。

——終わった。

早くも俺の平穏が終わった。

「春樹、何をしていますか？」

「セラフィムか。見ての通り、ボウリングをしているんだが」

「そんなことは分かっています。あなたの隣にいる人は誰かと聞いているんです」

隣に座っている瀬奈を見ていた。

「春樹君、あの人、誰ですか？」

「はあ、紹介するよ。彼女はセラフィム。今、歩の家に居候している人だ」

「どうも」

頭を下げるセラ。

「そして、彼女は橘 瀬奈。俺の幼馴染だ」

「橘 瀬奈です」

彼女も同様にお辞儀をする。

「じゃ、そういうわけで」

早くここから抜け出したかったので、瀬奈の手を掴み、帰ろうとした。

だが、セラが俺にこう言ってきた。

「ここで会ったのも何かの縁です。勝負しませんか？」

ピタリと足が止まってしまった。

勝負と言われてどうしようかと迷ってしまった。

「どうしたんですか？ 別に逃げてもいいですよ」

「上等だ、やってやるうじゃねえか！」

見事に相手の罠に引っかかる俺だった。

結果は惨敗。俺は三回ぐらいしかストライクを取っていないが、セラは全部ストライクだったのだ。

——っていうか、それって反則じゃね？

スプリットの時なんて、ボールが直角に曲がってたぞ。

「私の勝ちですね」

ふふっと笑うセラだった。かなり悔しい。

「ま、あれはしょうがないだろ」

俺を慰める歩。歩達もこの試合を見ていたようだ。

「おいおい、お前まであの美女たちのことを知ってんのかよ！ただでさえ橘さんと付き合っているというのに」

「付き合ってねえよ！」

織戸は羨ましそうに俺を見てくる。マジで気持ち悪い。

「アユム！服買って！」

ハルナが歩に抱きついてきた。どうやら、ボーリングでパーフェクトを出したらしい。

結局、みんなで衣服売場まで行くことになった。

ハルナは歩を連れまわし、衣服を見ていた。

俺の後ろにいるセラも物欲しそうに服を見ていた。

「欲しいものがあたら買ってやるよ」

「いいのですか？」

「まっ、ボーリングに負けたからな。それくらいのことはいいぞ」

「あ、ありがとう」

笑顔で俺に返してきた。なんだか照れくさくなる。

「春樹君、私もいいですか？」

「はあ、お前のもついでに買ってやるよ」
「ありがとう、春樹君！」

瀬奈も嬉しそうに服を選びに行った。

途中でセラと一緒に服を選んでいたのが目に入った。ちゃんと話せていて、安心した。

俺も服を買おうかと適当に見ていたが、偶然歩とユーがエレベーターに乗っていくのが見えた。

気になってエレベーターの前まで行き、エレベーターが止まった先は屋上だった。

何か大事な話をするんだなと思い、もう一度服を見に行った。

いろんなものを買い、デパートの入り口でみんなと別れた。
俺は今、瀬奈と二人で帰っている。

「今日は楽しかったですね」

「ああ、お前も友達ができてよかったな」

「はい！」

意外とハルナ達と会話が弾んだらしく、今でも嬉しそうな顔になっている。

適当に話をしている内に、瀬奈の家までついたようだった。

「それじゃあな」

「ご飯、食べていけないんですか？」

「今日はコンビニで済みたい気分なんだよ」

昨日食べられなかったので、今日こそ食べたいと思った。

別れを告げて、コンビニまで向かおうとしたが、突然歩からメールが来た。

『ピザでもとろうと思うんだが、お前も来るか？』

一発でOKメールを送った。コンビニはいつでも買える。だが、ピザは高いから一人暮らしの俺にとっては、ほとんど食べられないものなのだ。

行先をコンビニから歩の家に変えた。

第九話

「ピザ食いに来たぜ！」

速攻で歩の家へ行き、力強く扉を開けた。

「はっ！」

玄関には鏡の前でネコミミを付けながら「にゃー」とポーズをとっていたセラがいた。

——見てはいけないものを見てしまったような気がする。
俺はそーっと出て行こうとしたが、セラに手首をものすごい力で握りしめてきた。

「忘れなさい」

「い、いや……」

「忘れなさい」

「……はい」

今日のことは胸にしまっておこうと思った。

「やったーあ〜っ！」

大はしゃぎになるハルナ。

テーブルの上には、シーフードとエビマヨ、さらにササミのピザが置いてある。

かくいう俺も、早く食べたいという衝動に駆られている。

「ピザなんて何時振りだろうか」

早速手を伸ばす。シーフードのピザはともうまい。

隣に座っているセラを見ると、何故かピザとにらめっこをしている。

「何してんだ？」

「私は和食以外を口にすることがありませんので、恥ずかしながら少々怖いのです」

「いいから食べてみろつて。早くしないとなくなっちまうぞ」

俺の言葉に従い、ピザを食べてみるセラ。一口食べたなら、美味いと思ったのかどんどん食べ始める。

「素晴らしいですね。これほどとは……」

セラもお気に召したので、みんなでピザをお腹いっぱい食べることができた。

「アユム、携帯貸して」

「ほらよ」

食べ終わったハルナが誰かに電話をするらしい。

「あ、大先生ですか？——え？あ、そうですか。でしたら、リフレイン年ライジング組の出席番号六三四五二六三七九のハルナから電話があつたことだけ、お伝えください」

「なんだよお前のクラス！——クラス何人いるんだよ！」

思わずツツコンでしまった。なんだよ、リフレイン年ライジング組

って。

どうやらハルナは、この世界にあるアーティファクトのことで電話をしたらしい。

「なんだ？　アーティファクトって？」

歩が尋ねてみた。

「たしか……名前はキョウドウ……キョウフ……恐怖っていう名前だったような」

「それって形があるものなのか？」

「当たり前だろう！　こう、四角くて柔らかくて」

歩は俺達を見て「知ってるか？」と聞いてみたが、俺にわかるはずもないので、首を横に振った。

そんな時、玄関のチャイムが鳴った。

「俺が出るよ」

俺は立ち上がり、玄関まで向かった。ピザを奢ってもらったし、それくらいはしておこうと思った。

扉を開けると、二足歩行のドーベルマンがいた。

「どうも、自分はケルベロス・ワンサードと言います」

——絶対にツツコまないぞ。

なんとか我慢してる俺。

「何の御用ですか？」

「あなたはまだ生きているのでいいのですが、相川　歩さんと呼ん

でくせんせんか？」

「はあ……」

とりあえず歩を呼びに行き、そのままリビングでくつろいだ。

「誰だったのですか？」

「ん？ 二足歩行のドーベルマン」

そんなことを言っていると、突然歩が肩をおさえながらユーの元まで来た。

「ユー！ すまん。いきなりだが治してくれ！」

ユーは無表情のまま左手のガントレットを外し、歩に手を当てた。すると、出血は止まり、傷は癒されていた。

——これって、俺がセラと戦った時にも治してくれた能力なのか？

「ユークリウッド・ヘルサイズ様ではありませんか。最近見ないと思ったら、こんな所に」

ドーベルマンは歩とユーを交互に見て、何かを悟ったらしく座りだした。

「まったく、あなたの仕業ですか……。そうとわかっていたらこんな所には来なかったのに」

『忘れてた』

「もう、俺とは戦わないのか？」

「はい、ヘルサイズ様がしたことなので」

なんだかよくわからないまま、さっきの戦いの件は終了してしまっ

た。

「わかってますか？ 相川さん。ヘルサイズ様があなたの傷を癒した意味」

「はい？」

『大丈夫 耐えられる痛み』

「ヘルサイズ様は対象物を治す代わりに、自分がその分の痛みを請け負うのです」

——ってことは、俺が以前治してもらった傷もユーが請け負ったってことか？

「ユー、すまんかった」

「俺も、悪かったな」

歩と俺の二人でユーに謝る。

『かまわない』

本当に申し訳ない気持ちになった。

「でしたら、私はそろそろお暇させていただきます。そうそう、この近くで人が殺されかけているので、その魂も連れて行こうかな」
「ちよつと待った！ 俺も連れてってくれ」

急に歩が言い出す。確かに、ドーベルマンの後を追えば歩を殺した犯人が分かるかもしれないからな。

そして、歩はドーベルマンと一緒にどっかへ行ってしまった。

歩が出かけてから十分くらいが立った後、俺もそろそろ帰るよと言って自宅に向かった。

いつものように竹刀は持ってきている。いつ襲われるかわかったもんじゃない。

人は誰もいなかった。今、ここを歩いているのは俺だけだ。

だが突如、背後からすごい殺気が襲ってきた。

急いで横っ飛びをし、さっきまで俺のいた場所には俺の心臓を刺そうとしていた刃物があった。

夜で顔は見えないが、そいつから距離をとった後、竹刀を刀に変え構えた。

「驚きました、まさか私の金縛りが効かないなんて」

「誰だ、お前？」

声からして、明らかに女の声だった。だが、肝心の顔が見えない。

「今日はもう、殺すのはよししょう。さっき犬のメガロと男性を殺して満足しましたので」

どうやらドーベルマンは殺されたらしい。

だが、歩がゾンビだとわかっていなかったのは幸運だ。まだ生きているだろう。

「それでは」

彼女は消えた。さっきまでの殺気はもうなくなった。

俺は安心したのか、膝が急に笑い始めた。

「やべえな」

恐怖とかそういうもんじゃない。きっとこれは武者震いだろう。
次に会ったら、戦ってみたい。そう思ってしまったのだ。
俺は家に直行し、すぐに寝た。

第十話

俺は朝、早めに起き、歩の家へ向かった。
昨日の夜の出来事をみんなに話した。

「お前、よく生きていたな」

「ああ、今でも不思議に思ってるぞ」

「それで、連続殺人の犯人は女性なのですね？」

「確かに声は女性だった」

犯人の特徴を教えると、今度は歩がユーのことについて話してくれた。

デパートの屋上でのこと、昨日俺が帰った後のことだ。

まずユーの能力は、ユーの言葉を聞いた人間は無差別にその言葉の通りになってしまうこと。

そして、彼女はメガロ側の人間、つまりメガロは冥界で作られているということだ。

「なるほどな……」

ユーの正体を知り、うなずく俺。

『嫌いになった？』

「んなわけないだろ。お前は俺の友達だ」

ユーはこれ以上何も書かなかった。

「とりあえず、そろそろ学校に行こう。ないうちに」

時計を見たが、まだ六時にもなっていない。

「俺もついでに行くか」

俺と歩は立ち上がり学校へ行こうとするが、ユーが新たに何かを書いてテーブルを叩いた。

『今日はここにいろ』

命令形だった。学校をサボるわけにはいけないので無理だと言った。

学校ではのんびりと授業を受け、何もイベントは起きないまま放課後まで過ぎていった。

途中、織戸と歩から京子の見舞いに誘われたので一緒に行くことにした。

「悪いな、今日は用事があるから先に帰っててくれ」

「なら、私も一緒にいます！」

「いや、その用事は夜までかかるし……最近殺人事件もあるし、お前は家に帰ってろよ」

「殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ」

「え？」

俺は瀬奈の言葉に耳を疑った。

——どういうことだ？

最初は疑ったが、時間もないので後で考えようと思い、瀬奈を強引に帰らせた。

病院まで到着し、京子の部屋まで行く。京子は歩が来たことを喜んでいた。

「あ、相川さん、これ……」

京子は歩に何故か豆腐を渡してきた。

——そういえば、登校中に歩が言っていたなあ。ハルナのアーティファクトが京豆腐だと……。

そんなことも思ったが、俺はもう一つのことを疑問に思った。

——似ている。

昨日の夜、俺に話しかけてきた女に……。

ここで言ってもきつと頭がおかしいと思われるので明日にでも聞いておこうと思った。

「どうかしたんですか？　もしかして熱でもあるんじゃない」

京子は俺の額に触り、熱を測ろうとするが、ないことがわかりすつと手を戻した。

「そろそろ帰るわ」

歩が呟き立ち上がる。俺も歩に続く。

「あ、じゃあお見送りします」

京子がそう言い、ベッドから降りた。

織戸はトイレへ行き、先に退室する。三人で病院の入り口まで向かう。

京子は俺達が見えなくなるまで手を振っていくつもりなのか、ずつと俺達のことを見ている。

歩は大先生とかいうやつに電話をする。

隣にいても聞こえなかったので、電話を切った後に聞いてみた。

なんでも、手に持っている京豆腐を九時に墓場まで持っていくという内容だった。

今日は歩の家で泊まることにした。ユーに言われたのでここにいることにした。

『変わったことは？』

特になかったので、二人で首を横に振る。

その後、何も言わずにテレビに目を戻した。

みんなが居間に集まると歩は九時に墓場で大先生に会いに行くと伝えると、みんなに言った。

「俺も行つていいか？ 大先生っていう人に会ってみたいし」

「別にかまわないけど」

俺は歩と一緒に墓場まで向かった。

墓場まで着くと、卒塔婆の陰に人がいた。

「大先生ですよね？」

歩が陰にいる人に言った。

だが、その人は返事をせず、歩に向かって刃物で突き刺した。

「なっ！」

「こんばんは。相川さん、藤島さん」

につこりとほほ笑み、俺は歩を掴み彼女から離れた。

「あなたは何回殺せば、死ぬのですか？」

見たことのある木刀と剣を両手に持ち、目を細める。

あれは、ある人の病室にあったものと同じものだった。

そして、彼女の正体は——京子だった。

「やっぱり、あの連続殺人事件の犯人はお前だったのか、京子！」

俺は竹刀を構え、歩はなんとか立ち上がり、京子を睨みつけた。

「俺を殺したのは、お前だったのかよ！」

第十一話

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

どこかで聞き覚えのある呪文だ。

唱え終わると、京子の服装がコスプレ衣装に変わった。

あれは、魔装少女の服装ではないか。

ここで俺は、瀬奈の言っていたことを思い出した。

『殺人事件？ そんなの、最近起きていませんよ』

京子は記憶操作で事件のことを誰も知らないようにさせたんだ。なぜ、俺が記憶を操作されなかったのかは今は置いて。

「歩、お前、動けないのか？」

「どうやら、そうらしい。なんでお前は動けるんだ？」

「俺だってわかんねえよ」

さっきから動けない歩を掴み、京子から逃げようとするが、やっぱり魔装少女は速い。

一瞬で俺の前まで来たのだ。

「どうしてあなただけ、結界が効かないのですか？」

「さあなっ！」

刀を振るい、京子に攻撃するが防がれてしまう。

その瞬間、俺は歩を遠くまで蹴り飛ばした。蹴り飛ばした先は、いつの間にか来ていたハルナのもとへ。

京子は空いているもう一方の木刀で俺の横っ腹を殴る。

ギリギリ、木刀の軌道に合わせてバックしダメージを軽減したが、歩の元まで吹っ飛ばされた。

――骨は折れていないが、ダメージはかなりくらってしまった。

「しっかりしろ！ 春樹！」

どうやら歩は動けるようになったらしい。ハルナが結界を解いてくれたのだろう。

「で、アユム。こいつ誰？」

「俺を殺した魔装少女様だ」

「アユムの敵？ …… だったら、あたしの敵だな」

今度はハルナと歩が京子に立ちふさがった。

「へえ。ミストルティンはどうしました？ 素手で戦うつもりですか？」

京子は俺達の間合いを詰めようとするが、歩が俺とハルナを掴みその場からと跳んだ。

「逃がしません」

のんびりとした声で俺達を追い、木刀で薙ぎ払おうとする。

「なめるなよ！」

俺は掴まれたまま刀で防御したが、やっぱり打ち勝てないので地面まで飛ばされるが、歩が着地し俺とハルナの負担を減らしてくれた。

「まだ動けるのですか？ それなら、一気に殺してしましましょう」

京子は剣を上に掲げ、剣の先には巨大な火の球が現れた。
火の球は、俺達に向かって飛んできた。

今動けるのは俺だけ、ハルナは気絶しているし、歩は着地に失敗したのか、うまく立てないでいる。

——ああ、もうっ！ くそっ！

歩とハルナを持ち、火の球が当たらない所まで飛ばした。

「春樹！」

歩の叫ぶ声が聞こえる。ああ、なんでこうなるんだか。
ここで俺は死ぬのだろう……。

後悔はしていない。やるだけのことはやったんだ。
でも、できるならもう少し人生を楽しみたかったなあー。
火の球は俺の目の前まで飛び、爆発した。

「これで一人目ですね」

「春樹——！」

歩の叫び声が聞こえた。

——ってなんで聞こえるんだよ！ 俺、死んだんじゃないのか？

「あれ？」

なんで生きているんだ？

しかも、俺は何もダメージをくらっていない。

——どういうことだ？

京子を見ているが、彼女も驚愕していた。

「なんで……、生きているんですか。あなた、まさか人間なのに魔法抵抗力が高いのですか！」

何言ってるんだ？ 魔法抵抗力？ なんだそれ？

「ごく稀に存在する魔法抵抗力。それは高度な魔法も効かないと、昔聞いたことがあります。まさか、あなたがそのような能力を持っていたとは」

後ろを振り向くと、セラが木の葉の剣とチェインソーを持ってやって来た。

「セラフィム、来たのか！」

「ヘルサイズ殿に言われて加勢に来ました。とにかく、あなたが生きていてよかった」

俺に向けて嬉しそうにほほ笑んだ。

セラは俺を掴み、歩の元まで向かう。今日の俺って、掴まれてばっかじゃないか？

ハルナも目を覚ましていた。

「歩、敵は人間——ですか」

「心配するな。あれは人間の皮を被ったバケモンだ」

歩がセラに言う。そういえば、吸血忍者って人間を殺せないんだっ
たな。

歩もつまいことを考えるなあ。

「あれ？ その目……私と同じじゃないですか」

おいおい、今度は目が赤くなったぞ。彼女は吸血忍者なのか？

「知りません。私とはまた、別の力を感じます」

確かに、セラとは雰囲気が少し違う。

そして、セラの言っていた別の力が現れた。

それはメガロがよく吹く紫色の風だった。

——今度はメガロの力かよ。

「では、いきますよ」

京子は竜巻を出してきた。まためんどくさいものを……。

「こうなったら、歩、とつとと変身しろ！」

「ぐっ！ やっぱり、しないとダメ？」

「いいから、しゃがれ！ みんな死ぬぞ！」

「ああーもう、分かったよ！」

俺は歩を説得させるのに成功した。

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ」

歩が光だし、その中から出てきたのは、やっぱり変態だった。

「いつ見てもその姿は変態ですね」

「うん、変態だな」

「とつとと消えろ、このクソ虫」

「春樹のが一番傷つくわ！」

「相川さんにそんな趣味があるとは知りませんでした、変態！」

あ、相川が崩れた。なんとか立ち上がりセラと歩で京子に向かった。歩は竜巻をうまく避け、京子の前まで向かった。

チェーンソーと木刀でつばぜり合いになるが、歩はチェーンソーを捨て、京子に抱きついた。

そして、セラが歩ごと京子の心臓を刺す。

京子はそのまま崩れ落ちた。

「終わったようですね」

セラが俺に近づき、そのまま俺の胸に飛び込んだ。

「セラ！」

セラの後ろを見ると、背中に剣が刺さっていた。

「一回死んでしまいました——ですが、残念です」

そこには死んだはずの京子が立っていた。

第十一話（後書き）

少しオリジナル要素を入れてみました。
別に春樹はチートではありませんので。

第十二話

「セラフイム、大丈夫か！」

「ええ、一応大丈夫です」

セラの無事を確認してほつとする。

「おいおい、死んだはずなのになんで生きてるんだ？」

俺は京子に聞いてみる。

「私はゾンビではありませんが、あと十回ほど死ねますから」

「まさか、生体の宝珠！」

「なんだ、生体の宝珠って？」

歩が何かに気が付いたハルナに聞く。よく見ると、歩はすでに変身が解けている。

「生体の宝珠は死んだものを生き返らせるアーティファクトだ。生きているものに使うと一度だけ死を無効にしてくれる」

「なんだよそのRPGとかにありそうなヤツ」

思わずツツコンでしまった。

「なるほど……だから人間を殺しまくっていたのか。殺した人間を魔力に変えて宝珠を作ったのか」

「相川さんって意外と詳しいんですね。変態のくせに」

また歩が落ち込んだ。いいかげん慣れるよ。

「やっと来てくれましたか。お待ちしてましたよ」

京子が後ろにいる人を見ている。後ろを振り向いてみると、そこにはユーが立っていた。

やがて、俺の前に行き、そして歩の前まで行った。

京子は火の球をユーにぶつけてくるが、それを片手を払うだけで消してしまった。

——やっぱりユーって強いのか？

そんなことを思っていると、京子は次にユーの元へ向かい剣を縦に振った。

ユーはまた片手で防御するが、すぐに膝を崩してしまった。

京子は不思議がっており、ユーのプレートアーマーを蹴り飛ばした。

——あれ？ ユーって強いのか？

疑問に思ってしまった。

「……なるほど。その籠手は、藤島さんと同じように魔法を消し去る効果があるようですね。ですが、扱う人間が弱すぎます」

京子が呆れている。ユーのほうはハルナからチェーンソーを奪い、誰にも聞こえないように何かを唱えていた。

——まさかユーまで変身するのかよ。

予想通り、ユーはプレートアーマーの内側に例のコスプレ衣装が着られており、魔装少女になった。

チェーンソーを持ちながら、京子に突っ込んだ。

「……そうか、ハルナの魔力を奪ったのは俺じゃなくてユーだったのか！」

歩が謎が解けたようにユーのほうを見て言った。

ユーは魔装少女になっても京子の足もとには及ばず、また俺達のほうまで吹っ飛ばされた。

「ユー、俺も一緒に」

『逃げる邪魔』

ユーは地面に書き、俺達に見せた。

『せめて 動くな 絶対』

最後にそれを書き、また京子の元に向かった。
もしかしてユーは……。
歩はユーをほっておけないのか、ユーの元まで行こうとするが、俺とセラが歩を止める。

「やめろ。お前が言っても邪魔になるだけだ」

「どうということなんだ？」

「春樹の言つとおりにしなさい。ヘルサイズ殿の力を忘れたのですか？」

「それがなんだって——」

やっと歩が俺とセラの言いたいことに気づく。

そう、ユーの能力は言葉を聞いた者は言葉通りになる。

つまり、ユーは京子にこう言っただろう。

死んで——と。

いきなりユーの場所が光りだした。きつと言葉を発したのだろう。

「あでっ！」

空からユーが降ってきて、俺の頭に直撃した。しかもプレートアーマーを付けていたのもものすごく痛い。

「大丈夫か！　おい！　ユー！」

歩が必死で呼びかける。脈はあるが、目は覚まさない。

「まだ死んでいませんよ……その人の魔力を手に入れるために、わざわざこの姿で戦ったのですから」

耳に血を流した京子が近づいてくる。

——こいつ、まさか耳を切ったのかよ。

京子は自分の心臓を刺し、また復活した。その時にの傷もなくなっていた。

「さあて、パーティーを続けましょう」

笑う京子にかなり腹が立ってきた。

みんなも怒りを表に出しており彼女に向けた。

「みんな、行くぞ！」

俺が叫び、みんなが京子に突っ込んだ。

歩とセラとハルナが先陣をきり、攻撃した。

しかし、三人は吹き飛ばされるが、俺の存在に気づき、攻撃を防御する。

京子は俺を押し返そうとするが、あえて俺はここで一步引き躲す。勢いがついたせいで前のめりになった瞬間に俺は京子の背後に回り込み、全力で斬る。

「藤島流——風車！」

京子は体制を崩しながら復活するが、俺は復活した瞬間にまた斬りつける。

「お前が復活する瞬間に切る！ さて、あと何回切れば死ぬんだ？」
「たかが人間なんかに……」

また斬りつける。そして、京子のコスチュームが消え、黒マントだけの姿になった。
どうやら魔力が切れたのだろう。

「あ……ああ……うああああ！」

京子は俺から逃げる。だが、今度は歩が京子の前に立ちふさがる。

「……ありがとう。お前に殺されたおかげで人生が変わったよ」

京子は悲鳴すら失い、ただ歩の言葉を聞いている。

「——だから、今度はお前の人生を変えてやる」

歩は全力のパンチを京子に放った。盛大に吹っ飛び、地面に着いた時には彼女はもう動かなくなっている。

「終わりましたね……」

セラが傷を抑えながら俺の元によって来る。

「大丈夫か？」

「いいえ、しばらく歩けそうにありません」

「しょうがないな」

俺は後ろを向いてしゃがんだ。

「おぶってやるよ」

「しかたないので……あなたの言葉に乗りましょう」

俺に体重を預ける。背中にかかる胸の圧力を感じながら立ち上がる。隣では歩がハルナをおぶっている。

俺達はユーの元に戻った。

「「ユー」」

「ヘルサイズ殿」

「おい、根暗マンサー」

ユーは俺達の声聞き、目をゆっくりと開ける。

「なあんだ、生きてんじゃん」

ハルナは残念そうにしていたが、アホ毛をピコピコ動いてたので本当は喜んでるのだろう。

『終わったの？』

「ええ、春樹と歩がやってくれましたよ」

セラが言うと、ユーは満足してくれたかのような表情に見えた。歩は京子を見たが、彼女はまだ逃げようとするので、最後のとどめの一撃を繰り出そうとしている。

歩は拳を振り上げ、京子に下ろそうとしたが、突然誰かが現れ歩の腕を掴む。

「おい、止めるなよ。こいつは生かしておく訳にはいか——」

歩は後ろを向いていたので気が付かなかったが、振り向くと声を失った。

「あなたがアユムさんですねえ？　ウチの生徒に何するんですー？」
「だ、大先生」

ハルナが動揺していた。
この女が大先生？

第十二話（後書き）

風車——相手の刀を押さえ、押し返そうとする相手の力を利用して
一歩引き、前のめりになった瞬間に背後に回り込み斬る技。

第十三話

歩は大先生につかまれた腕を振りほどこうとするが、彼女の力は強くてほだけそうもない。

「大先生、腕を離してくれ。京子はこの世界でやってはいけないことをしたんだ」

「んー、信じるにはあ、材料が少なすぎますねえ」

大先生は小さなポケットから日本刀らしきものを取り出し、歩を斬ろうとした。

「楽しいダンスだった」

突然京子から男の声をだし、歩と大先生を吹き飛ばした。

「そんな……なんで……」

声を出したのはユーだった。俺はユーを見ると、その声に怯えている。

「元気そうで何よりだ、ユークリウッド。まだ何もするつもりはないから安心してくれ。」

京子は霧に包まれ、この場から立ち去ろうとする。

「では、皆さん。また会いましょう」

「どうやら、歩さんが正解のようですね。逃がしませんよあー!」

大先生は京子を追って消えた。歩も追いかけようとするが、ユーに抱きつかれて、動けなくなった。

ユーは震えてる。きつと、追いかけるとマズいのだろう。

「ユー、さっきのアイツは誰なんだ？」

俺が質問すると、ユーはしゃがんで文字を書く。

『あれは あの霧は 私が消滅させたはずの――』

『ゾンビの力』

あの日から数日が経った。

大先生は俺たちの話を信用してくれて、今では京子を捕まえるために搜索を続けている。

これで、誰にも知られぬまま連続殺人事件が終了したわけだ。

そして今、俺と瀬奈は歩に呼ばれ一緒に来ていた。

「「おじゃましーす」」

早速居間まで行くと、テーブルの上にはなぜか石鹼が山積みされていた。

「来てくれて助かった。実は、プリンを作りたくてだな」

「ああー、だからコレを買ってきてくれて言ったのか」

袋の中身を見る。中には卵や牛乳など。俺には何を作るのか分からないので、歩の言うとおりにしていた。

「セラさん。こんにちは」

「ええ、こんにちは」

セラと瀬奈は友達のように接している。

「瀬奈もセラフィムも仲がいいな」

俺は素直に感想を言った。

「春樹、今まで気にしていましたが、あなたは どうして『セラフィム』と呼ぶのですか」

「え？ だって『瀬奈』と『セラ』って呼び方が似てるじゃん。だからお前のことをセラフィムって呼ぶんだよ」

「そ、そういうことだったのですか」

セラがほっと息を吐く。どういうことだろう？

「ほら、アユム！ さっさとじゃんじゃんバリバリ作るぞ！」

ハルナが急かしてくる。どんだけ作るつもりなんだよ……。

「では、私が牛乳を唐津焼に——」

は？ 唐津焼？ 牛乳で陶器でも作るつもりかよ！

「よし、セラ。お前は風呂でも沸かしてこい」

セラは歩の言葉にすね始めた。

「なあ、セラってもしかして……」

「ああ、ものすごく料理が下手くそだ。以前、俺が食べたとき、死にかけた。お前に『助けて』ってメール送っただろ」

ああ、あの時のメールはそういうことだったのか。

「ま、みんながいれば、さすがのセラフイムも変なものを入れないだろうし、一緒に作ってもいいんじゃないか？」

「お前が言うなら別にいいが」

セラはパツと表情が変わり、俺の両手を掴んできた。

「ありがとうございます！」

「お、おう」

「むっ」

少し照れくさくなり、瀬奈のほうに顔を向けるが、何故か彼女はムスツとしていた。

『歩——プリンを』

「ユー、プリン作れるのか？」

『まず 牛乳を唐津焼に』

「よし、お前は食器係な」

ユーの危ない行動を歩がなんとか止めてくれた。

——ユーも料理が苦手なのか。

「どうやるんだ？」

中身が入っているボールを前に、いきなりつまづいてしまった。
率直に言おう。俺も料理が苦手だ。

セラよりはひどくないと自信はあるが、それでもプリンを作れるほどの技術なんてものはない。

「まずは、泡立たないように回すですよ」

瀬奈が見本を見せてくれる。言われたとおりにしてやってみるが、力加減が難しい。

「こつやるんですよ」

瀬奈は俺の後ろに立ち、俺の手と一緒に泡だて器を持ち、かき回してくれる。

背中に瀬奈の豊満な胸が当たり、正直うまく回せない。

「あ、セラさん。何入れようとしてるんですか！」

セラを注意しに、俺から離れる。ひとまずホツとする俺。
順序はすでにオープンで焼く過程までいき、ようやく終わったと一息つきにテーブルへ向かう。

ユーも座っており、のんびりとしていた。

歩も休みに来たのか、ユーの隣に座った。

「なぜ、ユー。お前はこの生活をどう思ってるんだ？」
『嫌いじゃない』

ユーもなんだかんだでこの生活を気に入っているらしい。
それを聞けて安心している歩。

しばらくすると、オーブンが焼き終わった音を出した――さてと、プリンが焼けたんか。
俺はプリンが出来上がっているのを見に行った。

第十三話（後書き）

やっと一巻分が終わりました！

このまま二巻分も毎日投稿していけたらいいです。

第十四話（前書き）

2巻目がようやく始まりました。

第十四話

七月からは夏休みだ。

だが、それを楽しむためには期末テストで赤点を取らないようにしなければならぬ。

俺の成績は、はつきり言つてヤバい。下の上といったところだろう。赤点なんて、中間テストとかでよくとっている。

なんとしても赤点をなくして、夏休みをエンジョイしたい。

「……というわけで、教えて下さい。瀬奈様」

「別にいいですよ」

さすがは優等生。お前がいなかったら夏休みはずっと学校へ行つていただろう。

「よし！ 早速帰つて一緒に勉強しよう」

俺は瀬奈の手を引いて一緒に帰った。

帰り際に教室の人からは「リア充、死ね」だの不快な言葉が飛び交うが、そんなのを気にしていたら時間の無駄だ。

勉強会は俺の家で行われた。

俺は明日の教科を教えてもらい、出そうなところを丸暗記した。

「春樹君、やればできるじゃないですか」

瀬奈が褒める。どうやら俺は、やればできるほうらしい。

そんなことをずっとやっている、既に夜の九時を過ぎていた。

「瀬奈、そろそろ帰ったほうがいいんじゃないか？」

「そうですね。親もそろそろ心配しますし……」

瀬奈は名残惜しそうに言った。

俺だってそうさ。できるならこのテスト期間は俺に勉強を教えてほしい。

瀬奈を送り、家まで帰ろうとすると、ふと、あることを思い出した。
——そういえば、ハルナって天才だったんだよな。

俺は歩にメールをして、急いで家まで戻った。勉強道具を持ち、歩の家に直行した。

「よう、勉強を教えてくれ！」

チャイムもせず、居間に入ると、そこには勉強を黙々やっている歩と、偉そうに立っているハルナ。歩の隣で勉強を見ているユーに、テレビを小音量で見ているセラがいた。

「よう、来たか」

歩は手を止め、こちらを見る。

「なんだ？ 刀のも天才美少女ハルナちゃんの授業を受けに来たのか？」

「ああ、頼みます。教えてください天才美少女ハルナちゃん」

もう、なりふり構ってられない。赤点を避けるためならこんなこ

とだって耐えてやる。

「しゃーなしだな。早く座って聞けよな！」

ハルナ先生の指示に従い、勉強を開始した。

歩に聞いたところ、最初は訳の分からないことを言っていたが、ユーのおかげでまともになったらしい。

「セラフイム、お前地理とかは得意か？」

「ええ、数学とかはダメですが、古文と地理くらいなら」

「だったら、明日教えてくれ。明日も今日と同じ時間に来るから」

「？ どうしてもっと早く来ないのでですか？ 早くてもかまいませんが」

「それまでは瀬奈に教えてもらうんだ。あいつも教えるのがうまいけど、時間があるからな」

「……わかりました。明日、教えましょう」

「サンキュー！ 助かったぞ、セラフイム！」

お礼を言つと、顔が赤くなるセラ。そんなに恥ずかしくなるようなことを言っただけ？

とりあえず、今日はハルナ先生の授業を受けることにした。

——ヤバイ、完璧だ。

テスト当日、数学のテストは絶好調だった。

まだ二十分も余裕があり、見直しも大丈夫だった。

これも瀬奈とハルナ先生のおかげだな。

歩の家では意外にも、瀬奈とハルナが言ったテストに出そうなどころが偶然一致して、同じところをやったくらいだったので、充実し

た勉強だった。

残りのテストも、順調に進んだ。

「帰ろうぜ、瀬奈。今日も教えてくれるか？」

「はい、私は大歓迎ですよ」

さすがは瀬奈。寛大でいらっしやる。

靴箱まで向かうと、そこになぜか人だかりができていた。

「セラフイム？」

「春樹と瀬奈ですか。歩の教室はどこですか？」

「ああ、それなら俺と同じクラスだ。案内しようか？」

「ええ、お願いします」

俺と瀬奈は、教室に戻ることにした。

廊下を歩いていると、ものすごい視線がセラに集まっている。俺には殺意のこもった視線が集まってくる。

セラはそれでも凜としており、俺の後をついてくる。

歩の元まで案内すると、織戸が興奮してこちらにやって来た。

セラは織戸をゴミ虫を見るような目で見た後、歩の元へ向かった。

どうやら、ハルナから弁当を預かって来たらしい。

結局、歩とセラ、俺、瀬奈の四人で帰ることになった。

歩はゾンビなので日差しに弱く、セラに引きずられて帰る。

瀬奈は歩を心配そうに見ている。

「気にするな。歩はDMなんだ」

「えっ、そうだったんですか？」

「ちげえよ……。俺は太陽に弱いんだ」

引きずられたまま、弱弱しい声でツツコむ。

そのまま歩達と別れて、俺の家に着くと、早速瀬奈と勉強を開始し

た。

二日目は国語と地理なので、そこを教えてもらった。

黙々と勉強をしている中、突然チャイムが鳴りだした。

「はい」

俺は扉を開けると、そこにはセラがいた。

「どうしたんだ？」

「勉強を教えに来ました」

「え？　だって勉強は九時からじゃ」

「それだと短すぎますので、私が早めに来ました」

別にいいかと思い、セラを家にいれた。

「こんばんは、セラさん」

「瀬奈も元気そうで」

なんだろう、セラが来て空気がガラリと変わった。

「瀬奈。あなたはもう帰っていいですよ。親が心配するでしょう」

「大丈夫ですよ。今日は泊まるって言っておきましたので」

「あれ？　そうだったけ？」

「はい、言ってませんでしたか？」

言っていない。そう断言できる。

だが、二人の先生に教えてもらえるのは結構いいかもしれない。

教えは二人ともうまかったので、かなり身に付いただろう。
明日のテストも楽しみだ。

第十五話

二日目、三日目と順調にテストは終わり、最終日もなんとか終わった。

瀬奈とセラがつきつきりで教えてくれたおかげだ。

テスト期間はほとんど寝ていなかったもので、とっとと帰って寝ようと思った。

今、俺は一人で帰っている。家に向かっていく途中、セラが屋根の上を跳んでいるのが見えた。

「おい、セラフイムー！」

俺の声に気づき、跳ぶのをやめてこちらに来た。

「春樹、実は歩とハルナがメガロと戦っているので加勢しに来たんです。あなたも来ますか？」

「ええー、別にいいよ。早く寝たいし」

「そうですか……来ないのですか……」

そんなさびしそうな顔をするなよ。俺が悪者みたいじゃなか。

「しょうがない。何処に行けばいいんだ？」

「この近くの住宅街の裏です」

なんだ、意外と近いじゃん。

「春樹、武器はどうしたんですか？」

「京子の戦いでスピアもなくなったから、俺戦えないぞ」

「心配しないでください。いざとなったら私があなたを守ります」

頼もしい言葉を聞きながら、目的地まで着いたが、既に戦闘は終了していた。

歩とハルナだけでなく、もう一人誰かがいた。

そいつは、何故かとんこつラーメンを持っており、とんこつスープがあちこちに散らばっていた。

「セラフィム！ ひっさしぶりだなー。元気にしてたか？」

そいつはセラの元にやってきて、馴れ馴れしそうに背中をバシバシ叩いた。

セラは無言でそいつの足を払い、腕を固めた。

「近寄らないでください」

セラは厳しい言動でそいつに言った。

近くで見ると、よく見たら俺達と同じくらいの少女だった。

「歩、大丈夫か？」

「春樹まで来たのか。俺もハルナも大丈夫だ」

変態の服装のまま、俺に近づいてくるので少し離れた。

「で、コイツは誰なんだ？」

「名はメール・シュトローム。吸血忍者ですが、私とは敵対している派閥の人間ですよ」

俺の問いに簡潔で答えてくれるセラ。

——ってなんだよ、メールシュトロームって。RPGに出てくる技名じゃん！

そんなツツコみは置いて、その派閥というのは、吸血忍者の頭領をユーの力で蘇らせるための派らしい。

どうやらセラの所属している派閥が保守派。メールとかいう少女が革新派だという。

「アユム、メガロも倒したんだし……そろそろ帰ろ——」

「おい、大丈夫か？」

「触るな！」

歩の手助けに反発するメール。そりゃそうだろ、こんな服装だしな。俺の隣でハルナが歩に話しかけるが無視されてしまう。

「お前、どこ中だよっ！」

歩の胸倉を掴むメール。歩も負けずに言い返してきた。

「俺は高校生だ。お前こそどこ中だよ！」

「馬鹿にすんなっ！俺だって高校生だっつーの！」

そんなくだらない口げんかをしている中、ハルナが無視されたことにキレて、歩に近づいた。

「アユムのバカっ！あたしを無視するなよな！」

歩の背中を押し倒す。そのせいで、メールも巻き込まれてしまい歩に押し倒される形になった。

「ぶーーーーっ！」

思わず嘖いてしまった。なぜなら、歩とメールが

キスをしてしまったからだ。

固まっている歩を、ハルナが蹴り飛ばし、俺が蹴り上げ、セラがかかと落として地面に沈めた。

今、俺達はうんこつスूपでメガロを倒す対策を教えてもらうために、メールに秘密基地を案内させてもらっている。ちなみに、ハルナは歩の衝撃シーンを見てから、逃げるようにしてどっか行った。どうしてうんこつスूपがメガロに効くのだろうか。かなり気になる。

廃ビルに到着し、中に入るとそこには十人程度の吸血忍者がいた。少し歩くと、大きな機械が目に入った。どうやらこれは、うんこつスूपを降らせるための装置らしい。

「くだらないですね。ではこれで失礼します」

セラはここに居るのがあまりよくないようで、とっとと帰りたいらしい。

ここは敵対している派閥の基地だし、帰りたい気持ちもわかる。

「セラフイム。なんだか、この装置をぶっ壊すって言っている奴がいるんだが、知ってるか？」

「知りません」

「ほんとに？」

「はい」

メールは、これ以上追及はせず、よかったと笑った。

「最後に、セラフィム、こっち派に来ないか？」

「嫌です。失礼します」

セラは先に外へ出て行った。

俺と歩もセラを追い、家に帰ることにした。

帰り道セラは不機嫌な様子で、早足で俺達の前を歩いている。

「あの装置って、大丈夫なのか？」

今まで無言でいたので、何か話そうと思い、セラに聞いてみた。

「ええ、それなら私の上司が対処してくれるでしょう」

「ふーん。それならいいんだけど」

「いいえ、メールのことで問題があります」

メールと言われて、即座に歩を見た。きっと、あの時のキスのことだろう。

吸血忍者のキスは、婚儀の際に行うものだという。だから、あの時点で婚儀は終了したらしい。

しかも、吸血忍者は自分の感情よりも掟を優先してしまうほどのものだという。

「あなたはメールを愛しているのですか？」

「いや、別に——」

「でしたら、どんなことをしても避けるべきだった」

また無言で歩く俺達。

「それじゃあ、俺が今ここでセラにキスしたら、俺と結婚するの？」

「ええ、愛すると誓います」

俺の目を見て真剣に言う。

セラは顔が赤くなり、また背を向けた。たぶん、俺も顔が赤くなっているだろう。

「まあ、できればの話ですが」

セラは前を向きながら、俺に言った。

第十六話

七月七日、今日は七夕だ。

一人暮らしの俺にとつてはどうでもいい日だが、今日は歩に七夕をやるう誘われて家に行くことになった。

家に着くと、何故か外に笹が置いてあった。

「来たぞー」

居間まで行くと、何故かみんながポニーテールにしながら短冊を書いていた。

「お前ら、何の真似だ？」

「いいから、刀のもやれよな！」

ハルナから強引にゴムを渡される。

だから歩は俺を誘ったのか。後でシメる。

みんなが俺のほうに視線を向ける。まさか、やらなくちゃいけないのか？

みんな、うんと頷いた。

「しょうがない」

髪は短いので、歩みたいに小さくしか結えない。

「んで、お前らは何を願ひしたんだ？」

テーブルの上に置いてある短冊を見ると、そこには奇妙なものが書かれていた。

『福神漬けの海に入りたい ユー』

『この世の気持ち悪いものが根絶されますように（ゾンビ等々）セラ』

『地球がゆで卵になりますように ハルナ』

ツッコみたいが、なんとか堪えた。

「勝手に見んなよなっ！」

ハルナに短冊を取り上げられてしまった。
しょうがない、俺も何か願い事を書くかな。

『ゾンビが滅亡しますように 春樹』

「お前、絶対にふざけてるだろ！」

「春樹、いい願い事ですね」

「セラまでひどくないすか」

ギャグはもうやめといて、まじめに書いておこう。

『何事もない、平和な生活 春樹』

これが一番無難だろう。

ハルナ達に見られないようにしながら、笹に短冊をつるした。

この後、ハルナが訳の分からない儀式を行い、それなりに楽しい七夕を過ごせた。

七月十日、いよいよテストが返ってくる。

一時限目が始まる前、顔の知らない女性が俺を訪ねてきた。

「藤島 春樹だな」

「そうだけど」

「話は聞いているな。これが例のモノだ。相川 歩という者に渡し
てくれ」

「はあ……」

彼女は俺にメガネケースを差し出してきた。

それをどうして歩に渡すのかはよくわからないが、とりあえず渡せばいいのだろう。

名前を聞こうとしたが、彼女の携帯電話が鳴り、聞ける状況じゃなくなつた。

「私だ。そうか——それがどうした？ ……そんなことくらい自分で判断しろ！ 痴れ者がっ！」

携帯を片手に、どこかへ行ってしまった。
それにしても……このメガネはなんだ？
なんとなく黒縁のメガネをかけてみる。

「春樹君、おはようございます」

「ああ、おは——ぶっ！」

瀬奈にあいさつをしようと彼女を見たが、なんと下着姿だったのだ。
慌ててメガネを取り外すと、瀬奈はちゃんと制服を着たままだ。

——エロメガネかよっ！

心の中でツツコみを入れた後、数秒考えてからもう一度メガネをかけてみた。

俺だって男なんだ。女性の体も気にはなる。

「?」

瀬奈は俺の様子に首をかしげている。

瀬奈の体は、何もしみや傷などのないきれいな肌だった。

そして、上下とも下着が黒だったのだ。彼女の大きな胸が強調されるような感じのブラだ。

——こいつ、意外とエロいのか?

これ以上はマズイと思ったのでメガネをはずす。

瀬奈は俺を不思議そうに見ている。

「春樹君、大丈夫ですか?」

俺の額に手を伸ばす瀬奈。俺はさっきの光景を思い出してしまい、瀬奈から離れた。

「い、いや……大丈夫だから……心配すんな……」

瀬奈は安心したのか、自分の席に戻った。

はあ……と、ため息が漏れる。

——今のうちに渡しておくか……。

あのエロメガネはちよつと名残惜しかったが、歩にこのことを簡潔に教えて渡した。

放課後になり、もう夕日が沈みかけている頃だ。
今日は瀬奈に誘われたので、一緒に帰ることにした。

「今日は、夕食食べに来ますよね」

「あ、ああ」

「今日は私も作りますから期待しててください」

「そ、そうだな」

今日の俺は、瀬奈を見ると朝のことを思い出してしまい、つい言葉が濁ってしまう。

だが、もう一つ驚いたことがあった。

吸血忍者のメールがこの生徒だったらしい。

なんでも、高校では吉田 友紀という名前で通っており、織戸からはトモノリと呼ばれているそうだ。そのせいで、歩もトモノリと呼ばれるようになってしまったとか……。

突然、携帯が鳴りだした。歩からだ。

内容は、ゲーセンに来ないか？ だった。

ここからゲームセンターは近い。朝の煩惱を払うにはいいかもしれない。

「瀬奈、一緒にゲーセン行かないか？」

「別にいいですよ」

進路をゲーセンに変更した。

第十七話

ゲームセンターを少し回っていると、ようやく歩を見つけることができた。

「春樹、俺と勝負しろ！」

エアホッケーで勝負をしたいらしい。

「なんでいきなり」

「歩は私やハルナに負けたからですよ」

「ああ、なるほど」

セラが教えてくれて理解した。

ようするに、歩はせめて一勝したかったのだろう。

「別にいいぞ」

台の端に立ち、勝負を開始した。

訳の分からない必殺技を言いながらホッケーを打ってくるが、そんなものは俺には効かない。

俺は、一度も点を取られずストレート勝ちだった。

歩がもう一度勝負と言うが、もう一度やってやっても結果は変わらずストレート勝ちだ。

「残念だったな。頭の中が」

「ぐはっ！」

二連敗して、とうとう崩れ落ちた。

「せっかく来たんだ。瀬奈も一緒に遊ぼうぜ」
「はい！」

みんなそれぞれUFOキャッチャーや、アーケードゲームなどを楽しんだ。

「春樹君、一緒にあれを撮りませんか？」

瀬奈はプリクラの場所を指さしながら言った。

「別にいいぞ」

了承すると瀬奈は喜び、俺の手を引っ張り中に入ることになった。写真を撮る瞬間にセラが現れ、三人で撮ることになった。

「どうしたんだ？」

「いえ、あなた達が入っていくのを見たので。ダメでしたか？」

「俺はいいけど、瀬奈は？」

「私も別にいいですよ」

瀬奈は嫌な顔一つせず、三人でプリクラを撮った。

「いやー、楽しかったなー」
「そうですね」

みんなでゲームセンターを出る。俺は軽く伸びをする。辺りを見てみると、突然メガロが現れた。

白色のウサギで、お馴染みの学ランを着ていた。

「うさげっ！ 魔装少女！」

メガロは攻撃をしてこない。攻撃しようと構えている歩を見てただ叫んでいるだけだ。

「春樹君、あれは何ですか？」

「心配するな。ただの着ぐるみだ」

今は瀬奈がいるので、俺は早く帰らそうと思い、セラに近づいた。

「セラフィム、とりあえず瀬奈を家に帰してからまた来るから」

「わかりました。ですが、これならその必要はないと思いますが」
「一応、念のためだ」

セラ達とひとまず別れて、俺は瀬奈を家まで送った。

瀬奈の家まで着き、また歩の所まで戻ろうとした。

「悪い、一度家に帰ってからまた来るわ」

家に帰ると嘘をつき、急いでみんなの所に向かった。

幸い、近くの公園で歩達と出会った。

会ったのはよかったが、歩達の前にいるのは京子だった。

「歩、無事か？」

「俺は大丈夫だ。だが……」

歩はしゃがみながらトモノリ——今はメールか——を見た。
何かによって衣服を引き裂かれている。

「お久しぶりですね、春樹さん」

「俺はお前に会いたくなかったがな」

またしてもこいつに会うとは……、俺もついてないな。

「道端でいろんなメガロが吸血忍者らと戦っていたが、あのメガロはお前のせいなのか？」

「春樹、あれはメガロじゃない。メガロの偽物だ……」

そんなのはどうでもいいが、歩の様子が少しおかしい。

みんなを見ると、みんなが身震いをしている。そんなに寒かったか？

——……いや、違う！ これはあいつらの魔法か！

道路や建物が凍り始めている。これも京子の仕業か？

「やっぱり持つてるじゃないですか——アリエル先生の魔装兵器をつ！」

京子が驚きの声を上げた。彼女の足元も凍り始めたのだ。

——おいおい、その兵器っていうのは無差別攻撃なのかよ。

俺は魔法抵抗が普通よりズバ抜けて高いらしく、寒さも感じないし、足元も凍らない。

だが、みんながヤバイ状況になってきている。

セラはどこかの屋根にに跳んだが、歩は完全に足が凍ってしまっている。

「ハルナ、お前だけでも」

「何言つてんだ！ アユムも早く逃げろ！」

「くそっ！ もう下半身まで凍っているぞ！」

歩とハルナは、既に胸のあたりまで凍り始めた。セラを見てみるが、彼女の足まで凍っている。

「くっそー！」

俺にはどうすることもできない。なぜこうなっているのかさえわからない。

「逃げてっ！」

ユーの声が、みんなに響いた。

「あれ？」

気が付くと、俺は瀬奈の家の玄関にいた。

———どういうことだ？

俺の声が聞こえたのか、瀬奈が玄関までやって来た。

「あつ、春樹君。丁度夕食ができましたよ」

「えっ？」

そういえば、夕飯は瀬奈の家で食べさせてもらってたっけ。

「早く早く」

瀬奈に引つ張られ、そのまま夕食をご馳走になってしまった。

用事があると言って早めに家から出た俺は、急いで歩の家まで行った。

「みんな！ 無事か！」

「おわっ！」

急にやって来た俺にハルナがびつくりした。

「いきなり脅かすなよな、刀の」

「あ、ああ悪い」

どうやらみんな無事だったようだ。

『春樹 あなたは何処に飛ばされた？』

「実は——」

瀬奈の家に着いたことを話すと、ユーはまた新たに何かを書いた。

『やっぱりあなたは魔法抵抗が強すぎる だからあなただけ別の場所に移動した』

やっぱりあれはユーの仕業だったのか。

なにあとあれみんなが無事で安心した。

もう、帰るのがめんどくさくなったので、ここで泊まることにした。

第十八話

次の日の夜中、俺が寝ているときに歩から電話がかかった。

「……………もしもし？」

『春樹、今から墓地へ行けるか？』

「……………別に、行けるけど……………」

『なんでも、大先生がお前に渡したいものがあるらしい』

「……………何時に向かえばいいんだ？」

『十二時くらい』

時計を見ると、十一時半だった。

一体何を渡すのだろうか？

「わかった、今すぐ向かう」

電話を切り、軽く身支度をした。

「だぁー！　くそっ、ついてねー！」

墓場に向かう途中、俺はメガロに追われている。

竹刀も、あれ以来壊れたままなので今は手ぶらだ。

曲がり角に曲ると、曲った先に誰かがいた。

「危ない！」

「え？　……………きゃっ！」

そのままぶつかり、その子を押し倒してしまった。

「いてて……、悪い、大丈夫か？」

その子の顔を見ると、そいつは京子だった。

周りを見てると変態姿の歩とハルナがいて、どうやらここで京子と対峙していたらしい。

さつきから右手に柔らかくて妙な感触を感じたので、もしかと思いおそろおそろ見てみると、俺は京子の胸を揉んでいたのだ。

京子は顔を赤くしており、今にも泣きだしそうだった。

「うおっ！　悪い！」

彼女から急いで離れ、歩達の元へ向かった。

京子は立ち上がり、俺を怒りの目で見ていた。

「春樹さん、あとで覚えていなさい」

京子は最後にそう言い、何かを持って去っていった。

「……えっと、何があったんだ？」

歩とハルナは笑い出した。

話によると、京子が大先生に渡す魔装兵器を奪ったが、その中身はエロ本だったらしく、そして俺と激突して現在に至ると……。そんな話をしながら、墓場に着いた。

大先生は俺達に気づき、こちらまで来てくれた。

歩はエロ本が京子に奪われたことを話したら、笑い出した。

「アユムさん。いやらしい本が兵器なんて、どう使うおつもりなん

ですかあゝ？ もう、アユムさんのエツチい」

「大先生から預かったものと違うんですか？」

「何処ですかゝ？ どこにも居ないじゃあないですかあ」

どうやら、歩の持ち物には魔装兵器はないらしい。

「もしかしてえ、偽メガ口の大量発生は京子の仕業ですかあ？」

「ええ、本人が言っていました。気づいていたんですか？」

「メガ口はあんなに弱っちくくないですものゝ。それにあの子は私の計画も知って――」

何かを言おうとしたが、咳払いでごまかす。

「あの子ならあ、私が魔装兵器を使うと考えそうですし、それを狙ってるならなつとくですうゝ」

歩達の話が全然わからない。ハルナもわかってなさそうで、二人に馬鹿にされて拗ねている。

「では、私はヴィリエに帰りますねえ。アユムさんもご苦労様でした」

「いあ、ちよつと待てえー！」

俺が大先生に向かって言う。

「あなたは確か、春樹さんでしたね。どうかしましたかあ？」

「どうかしたじゃなくて、あんたが俺を呼んだんだろ！ 何か渡すものがあるって」

「ああゝ、そういえば忘れてましたゝ」

そういつて、大先生は白衣のポケットから刀を取り出す。だが、大先生はなぜか手袋をつけて取り出したのだ。

「これをあなたに差し上げますう」

「はあ……」

刀を受け取る俺を見て、大先生は「やっぱり」と声を漏らした。

「その刀は『花影血桜』^{かえいちぎく}と言いまして、呪いの刀なんですよう」

なんですようってこと言われても、俺の体は大丈夫なのか？

「それは所持者の魔力を死ぬまで奪う呪いの刀。ですが、あなたの能力ならその呪いに打ち勝つことができるでしょう」

「ふーん。なるほど」

刀を抜いて誰もいない場所に刀を振る。

すると、刀から衝撃波が発生し、墓石が割れた。

「……………」

言葉を失った。

「その刀に宿っている魔力は千年はもちますので、大丈夫ですよ」

「えーっと……ありがとうございます」

春樹は新たな武器を手に入れた。

俺は花影血桜を大事に持ちながら、家に帰った。

第十九話

刀をもらった次の日。

時刻は放課後になり、俺は歩と一緒に帰ってる。

「なんでお前が来るんだ？」

「いやー、この刀でもう一度セラフィムと戦ってみたいんだよねー」

「あの刀ならお前が勝てるんじゃないのか？」

「わかんねえぞ。セラフィムの力だってあんなものじゃないと思うけど」

俺は大先生からもらった妖刀——花影血桜を持っている。

誰とも戦うことができないので、夜にセラと勝負したかったのだ。

歩の家に着くと、玄関でハルナが電話の受話器を持ちながら唸っていた。

「何してんだ、お前？」

「あ、アユムに刀の！　いつからそこにっ！」

話を聞くと、ハルナが大先生に謝ろうかと、今まで考えていたらしい。

——あのハルナが謝罪をねえ……。

これには驚いた。いつもは自己中女のハルナが相手に謝ろうとしているのだ。

「だったら、ゲーセンにでも誘ってみたらどうだ？」

「うん！　それだっ！　大先生なら、絶対喜ぶな！」

そう言って、ハルナは大先生に電話を掛けた。

とりあえず、居間で待っていていようとユーと一緒にテレビを見ようとしたら、ユーがテーブルをトントンと叩いた。

『その刀 見せて』

「いや、それは不味いぞ。柄を掴むと魔力を吸い取られるらしいからな」

『私は籠手を着けてるから大丈夫』

どうやら、ユーの鎧や籠手は何か封印効果があるらしい。つてことは、この血桜よりも効果が上回るってことか？ユーに渡してみるが、何も変化はない。

『すごくいい刀』

「へえー、ユーもそう思うのか」

『これには膨大な魔力が入っている 今まで何人の人が死んだんだろっ』

「生々しいこと言っなよ！」

ユーがボケたぞ。しゃべってはいないが、なんだか新鮮味がある。その時、上から二人の声が聞こえた。かなり大声だ。二階へ行き歩の部屋まで行くと、歩とセラが喧嘩をしていた。

「おいおい、一体何があっただんだよ」

「春樹、このメガネを付けながら手紙を見てください」

セラに渡されたものは、なんとエロメガネだった。

手紙のほうを見てみるが、白紙だったので、メガネを付けて見ると文字が浮き上がって来た。

内容は、ユーの抹殺だった。

俺は無言でメガネを取り、セラを見た。

「お前は答えを見つけたのか？」

「はい。歩のおかげで吹っ切れました。私はこの任務を放棄します」
「お前なら絶対そう言うと思ったぜ」

俺は手紙を破り捨てる。

この任務を変更させるには、あの天候を操る装置を破壊すればいいらしい。

「お前と勝負したかったが、とりあえずそれを何とかしようぜ」

ハルナが出ていった後に、俺達三人はあのビルに向かった。

ビルの入り口に着くと、早速誰かが倒れていた。

中に入るとたくさんの吸血忍者が倒れていたが、全員何かで眠らさ
れているだけだった。

やっと例の機械の所まで向かうと、機械の前で倒れている吸血忍
者がいた。

よく見ると、あれはトモノリだった。

声を上げたかったが、殺気が背後から刺さって来たので叫べなかつ
た。

「誰かと思えば、セラフィムか。何しに来た？」

振り向くと、そいつは以前俺にエロメガネを渡してきた学生だった。

「その天候を操る装置を破壊しに」

「それは困る」

「なぜ？」

「人類吸血忍者化計画を円滑に進めるためには必要だからな」

「今、何と言いましたか？ まさかその馬鹿げた計画が我々の派閥から出たものだとは……」

「おいおい、私とやりあうつもりなのか？ 同じ保守派の吸血忍者だというのに」

二人の目が赤く染まる。

「歩、今は下がるぞ」

「ああ」

俺の言葉に従い、数メートルバックした。

「気の合う話は酒を交わしながら、気の合わない話は——剣を交わしながらっ！」

二人の剣がぶつかり合う。

何度か剣を重ねているが、セラのほうが劣勢だ。

「秘剣、燕返し！」

「秘剣、燕尾返し」

また剣が重なり合う。だが、女生徒の攻撃に敗れ、セラの胸元から血が出た。

「セラフィム、強くなったな——三撃も耐えられるとは思ってなかった」

歩には見えなかったかもしれないが、俺にはしっかりと見えた。

さっきの四回目の攻撃でセラは斬られたのが見えた。
俺はセラが戦闘不能になったので、セラの所まで向かった。

「春樹、あなたじゃ勝てません……。早く逃げて——」

「おいおい、俺がやられるとでも思ってるのか？」

セラに向かってニコリと笑う。セラは顔が赤くなりそっぱを向く。

「さて、次は俺の番だぜ」

「はん、たかが人間が私にかなうなど——」

まだ話途中に俺は花影血桜を抜き、ビルを少し斬った。
斬ったと言っても、それはかなりの威力で、外が見えるほどだった。

——まさか、これほどまでの威力とはな……。花影血桜。

女生徒は俺を驚愕の表情で見ている。

「貴様……。ただの人間じゃないな？」

「いいや、ただの人間だぜ。この刀はかなりの魔力が入っているらしいんで」

もう一度刀を振った。丁度いい重さだ。

「いいだろう、貴様の命もここまでだということをお願い知らせてやる！」

俺に向かって突っ込んできた。

第二十話

「貴様、なかなかやるな」

「吸血忍者つてのはみんな強いんだな」

剣が何度も重なり合う。

女生徒の攻撃は見えるので、攻撃を受け流すことは簡単だ。その瞬間に、彼女のスキを見つけて反撃した。

「見つけた！ 藤島流——畏綱^{いすな}！」

スキにめがけて素早い突きを繰り出した。

女生徒が下がったと同時に、刀から斬撃を出して相手を休めさせない。

「くっ！」

俺は彼女に突っ込み、斬りつけようとするが、彼女は背中から翼をだし、空中に避けた。

「おい、ずるいぞ！ 降りて戦え」

「ふん、貴様に勝てればそれでいいのだ」

空中から斬撃を飛ばしてくる。

俺も斬撃を飛ばし、攻撃を相殺する。

だが、最後の一撃も相殺させようと思ったが、体が疲れてしまったので血桜で防御した。

攻撃を受け止めると、片膝をついて休憩する。

——マズイ、俺の体力もそろそろ限界だ。

俺は人間なので、体力も吸血忍者より少ない。
なので、女生徒はまだまだ戦える状態だ。

「ふ、どうやらお前の体力もここまでだな」

「やっぱり分かったか？」

「安心しろ。掟により命は助けてやる」

剣を構える女生徒。俺は血桜を鞘に納め、目をつぶった。

「なんだ？ 春樹のやつ。勝負を諦めたのか？」

「あなたの目は節穴ですか？ あれは居合ですよ」

歩とセラの声が聞こえる。集中しているせいか、はつきりと聞こえた。

「ふん、居合とはな。さっさと終わらせてやる！」

こちらに向かって走る音が聞こえる。

——まだだ。もう少しだ。

音が消えた。きっと足音を消したのだろう。

——ここで慌てたら負ける。相手を感じ取るんだ！

かすかに風を切る音がした。

目を閉じながら攻撃を避け、俺は目を開きそこに刀を振った。

「藤島流——鏡心！」

渾身の一振りだ。だが、浅かった。

女生徒を斬ったと思ったが、彼女の姿が丸太になった。

——やられた、変わり身かよ！

背後から殺気を感じ、俺は急いで反転し、攻撃を防いだ。

「ぐあつ！」

が、力負けして壁に激突した。

——力が出ない。俺の負け……か。

女生徒は俺が戦闘不能になったのを見ると、剣を下した。

突然歩が俺の所に行こうと、物陰から飛び出すが、女生徒が剣を投げ歩の首に刺さった。

——こいつ……歩がゾンビじゃなかったら死んでたぞ……。掟破つてるじゃん。

「ん？　今ので死なないのか？　どういう仕組みか」

「とんこつスーブの雨を降らせるとか、人類吸血忍者化計画だとか、ユーを殺せとか、吸血忍者はどうしてそう、まとまりがないんだ？」

「そこまで思考すればわかることだろう。今、吸血忍者には絶対的な指導者、決定権を持つ者がいないからだ」

女生徒はそう言い、歩に何かを投げる。

歩はそれを直感で避けたのか知らないが、さっきまでいた場所は穴が開いていた。

女生徒が濡らした手で水滴を飛ばしたらしい。

「なるほど、だからユーに頭領を生き返らせてほしいとっ！」

歩が何かを投げる。狙った先は女生徒ではなく、あの機械の方だ。

爆音が鳴り響いた。どうやらあれは、爆弾のようだ。

だが、機械は破壊されず、隣の壁に穴が開いた。

女生徒があの一瞬間にはじいたらしい。

「残念だったな。この装置は壊させない。私が頂いていく」

女生徒の手に、何かが集まり、歩に放った。

「とくと味わえ——飛剣、百鬼漸殺」

歩の体に次々と水の剣が刺さっていく。

俺もやつと力を取り戻し、歩の元へ向かおうとするが、突如、どこからか声がした。

『最終詠唱を確認した。目標地点の重力を10Gに変更する』

その声と共に、歩の周りの水が地面に打ち付けられた。

誰がやったのか見渡してみると、それをやったのはトモノリだった。しかも、何か守護霊みたいのが憑いてるし……。

「スタンドかよ!」

思わずツツコンでしまった。

まあ、このくらい声を出せるならまだ大丈夫だろう。

トモノリに憑いているのは、右半身が人間、左半身が炎で出来ている二メートル近い男だ。

男は攻撃してくる女生徒を、いとも簡単に倒した。女生徒は壁に打ち付けられ気絶している。

それから男は訳の分からない呪文を唱え、あの装置を破壊した。

「友紀、お前どうしたんだ?」

歩がトモノリに聞いてみるが、返事はなく、返ってくるのは男の声だった。

『残存する敵の排除を開始』

——おいおい、俺達まで殺すつもりかよ。

「歩！ 何故戦わないのですか！ 彼女はこのような能力を持ち合わせていません」

あれはトモノリの能力とかじゃないのか？

——もしかして……あれが大先生の言っていた魔装兵器なのか？

あの時、大先生は魔装兵器が『居ない』と言っていた。

つまり、魔装兵器は人に憑いていたということになる。

今の男が魔装兵器ってこともありえる。

「しょうがない」

俺は男に向かって斬撃を放つ。

攻撃にぐらついて、トモノリから意識が戻った。

「あい……かわ。たす——」

また言葉が途切れ、意識を失った。

「凍てつく氷を解き放て」『第一詠唱を確認、術式解放』

また変な呪文を唱えた。

「其は神々の息吹さえも吹雪へと変えるだろう」『第二詠唱を確認、冷却準備完了』

「みんな！ ここから出るぞ！」

俺が叫ぶと同時に、

「駆け抜ける、アブソリュート・フェンリル」 『最終詠唱を確認した、氷結を開始する』

一瞬で部屋中が凍った。

この現象は、ゲーセンの時と一緒だ。

やっぱり、あの男は魔装兵器だったんだ。

どうすればいいのかと考えているときに、歩がトモノリの前まで行き、彼女を抱きしめた。

「やめてくれよ！ トモノリ！」

その瞬間、部屋の氷は解けて男は消え、トモノリは意識を取り戻した。

「と……トモノリ言うなーー！」

最後にそう言い、また意識を失った。

なんとか死の危機は免れ、今はみんな休んでいる。

女生徒とトモノリはまだ目を覚まさず、セラは輸血パックをチューチュー吸っている。

「血を吸わないと生きられないってのも、難儀なもんだな」

「私は吸血忍者になれたことを誇りに思ってますよ」

歩の問いに答えるセラに疑問を感じた。

「なれた？ 生まれたときからじゃないのか？」

「吸血忍者とは、ヘルサイズ殿から不老不死の力を与えられた者のことです。生まれた時からならば、ずっと赤子の姿じゃないですか」

ごもつとも。

「ってことは、あいつはユーの血を雨で降らせようとしたのか？」

「ええ、そういうことになりますね」

セラは息を切らしている。それほど血が足りないってことか。

「なんだったら、俺の血を吸えばいい」

「あなたの血を吸うくらいなら死んだ方がマシです」

歩の親切心をバツサリ切るセラ。そんなに歩の血が嫌なのか？
そのとき、歩に携帯が鳴ったので少し俺達から離れた。

「どうした！ おい、ハルナ！」

一体何があつたんだ？ 歩は携帯を切って俺達の方を向いた。

「春樹、セラ達を頼む」

「ああ、分かった」

歩はビルから飛び降りて、ハルナ達の所へ向かった。
俺も疲れたので、セラの隣に座った。

「おい、大丈夫か」

「はあ、はあ、大丈夫です」

「お前……血が足りないんじゃない」

「輸血パックじゃあ、どうも力が出ません」

「だったら俺の血を吸えよ」

「なっ！」

セラの顔が赤くなる。別に恥ずかしいことでもないだろう。

「俺はお前に死んでほしくないんだ」 春樹は吸血にキスをする
ことを知りません。

「ですが……」 セラは第七話の時に吸血を見られたと思っています。
ます。

「いいから、早く吸えよ！ 心配すんな」 春樹は吸血に――以
下略。

「……わかりました。ですが、目を瞑って頂けないでしょうか？」

セラは第七話の時に――以下略。

「？ これでいいか？」 春樹は――以下略。

今は目を瞑っているので、何も見えない。

突然、俺の唇に柔らかな感触があった。

キスされていたのだ。

「っ！」

唇にセラの歯が刺さり、思考が回らなくなった。

血を吸われているのがわかるのに、何故か気持ちいい。

ハルナが血を吸われた時と同じだ。

吸うのが終わり、セラを見ると、さっきまでとは違って肌がツ
ヤツヤしている。

ただ、顔が真っ赤に染まっていた。

——あれ？

確か吸血忍者は接吻をすると結婚なんだよな？

……まさか……。

「これで私たちの婚儀は成立しました。あなたを愛すると誓います」
朱くしながらも、はつきり言った。

「ええ——————！」

天に向かって叫んだ。

第二十話（後書き）

畏綱——するとい突きを連続で放つ技。

鏡心——相手の攻撃を見切り、そこから反撃する神速の居合。

まさかの展開になっちゃいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1115y/>

これはゾンビですか？～いいえ、俺は人間です～

2011年11月20日12時49分発行